

大菩薩峠

三輪の神杉の巻

中里介山



大和やまとの国、三輪みわの町の大鳥居の向つて右の方の、日の光を嫌きらつて蔭をのみ選よつて歩いた一人の女が、それから一町ほど行つて「葉屋」という看板をかけた大きな宿屋の路地口ろじぐちを、物に追われたいように駈けこんで姿をかくします。

よくはわからなかつたが、年はたしか二十二から七までの間、あまり目立たないつくりで、伏目に歩みを運ぶ面かおには、やつれが見えて何となしに痛わしいが、それでも、すれ違つたものを、一たびは振返らせる。鳥居の両側にはいずれにも茶屋がある、茶店のないところには宿屋があつて——女の姿をいちばんさきに見つけたのは、陸尺ろくしゃくや巡礼などの休みたがる、構えの大きい

わりに、燻くすぶつた、軒には菱形ひしがたの煙草の看板がつるされ、一枚立てきられた腰高障子には大きな蝋燭ろうそくの絵がある茶店の中に、将棋しょうぎを差さしていた閑人ひまじんどもであります。

「あれかよ、あれかよ」

「あれだ、あれだ」

碁将棋を打つ閑人以上の閑人は、それを見物しているやつであります。岡眼おかめをしていた閑人以上の閑人が、今ふと葉屋の路地を入つて行つた女の姿を認めた時は、一局の勝負がついた時であつたから、こんな場合には鬚まげの刷毛先はけさきの曲つたのまでが問題まになる。

「噂うわさには聞いたが、姿を拝んだのは今日が初めてだ、なるほど」

「惜あしいものだね——」

藍玉屋あいだまやの息子で金蔵という不良少年は、締りのない口元から、

惜しいものだね——と、ね——に余音よいんを持たせて、女の入つて行つたあとを飽かずに見ていたが、

「全く、あのままこの山の中に埋めておくは惜しいものでござ
いますなあ」

「ずぬ凶抜けて大きな眼鏡をかけた材木屋の隠居も、どうやら残り
惜しい顔をしている。

「全く罪ですな、およそ世の中にあのくらい罪なものはござい
ませんな」

ちよつと覗のぞきに來たつもりで、うかうかと立見たちみをしてしまつ
た隣の宿屋の番頭も、つり込まれて慷慨こうがいの体てい。

「さよう左様、全く罪なことでござるよ、あんなのはいつそ助けない方
がようござるな、添うそに添われず、生きるに生きられず、現世このよ
で叶かなわぬ恋を未来で遂げようというのじゃ、それを一方を殺し

一方を助けるなんぞ冥利に尽きたわけさ」

眼鏡の隠居は慨歎する。

「でもね——女に廃りすたりものはないからねえ」

藍玉屋の息子のねむそうな声が一座を笑わせる。

ここに問題となつた女は、机竜之助が鈴鹿峠すずかとうげの麓、伊勢の国せき関の宿しゆくで会い、それから近江の国大津へ来て、竜之助の隣の室で心中の相談をきめ、その夜のうちに琵琶湖へ身を投げて死んだはずのお豊——すなわちお浜に似た女であります。

一人は死に、一人は残る。そうしていま女は親戚しんせきに当るこの三輪の町の薬屋（薬屋といっても売薬屋ではない、旅籠屋はたごやである）源太郎の家へ預けられている。

助けて慈悲にならぬのは心中の片割れであります。

一方を無事に死なしておいて、一方を助けて生かしておくのは、蛇の生殺しなまごろしより、もつと酷いことむごである。

不幸にして、お豊はあれから息を吹き返した、真三郎は永久に帰らない、死んだ真三郎は本望ほんもうを遂げたが、生きたお豊は、その魂たましいの置き場を失うた。

これを以て見れば、天津の宿で机竜之助が、生命いのちを粗末にする男女の者に、蔭ながら冷やかな引導いんどうを渡して、「死にたいやつは勝手に死ね」と空嘯そらうそしていたのが大きな道理になる。

息を吹き返して、伯父に当るこの三輪の町の葉屋源太郎の許へ預けられた後のお豊は、ほんとうに日蔭の花です。誰が何と
いうとなく、お豊の身の上の噂は、広くもあらぬ三輪の町いつ

ぱいに拡がった。

お豊は離座敷はなれに籠こもったまま滅多めったに出て歩かないのに、月に三度は明神へ参詣します。今日は参詣の当日で、かの閑人ひまじんどもに姿を見咎みとがめられて、口の端はに上ったのもそれがためでありました。

女というものは、どこへ隠れても人の眼と耳を引き寄せる。お豊が来て二三日たたないうちに、夜な夜な薬屋の裏手の竹垣には大きな穴がいくつもあいた。ここへ来てから、もう七十五日は過ぎたのに、お豊の噂うわさだけは容易になくなりません。

かの藍玉屋の金蔵の如きは、執心しゅうしんの第一で、何かの時に愁うれいを帯びたお豊の姿を一目見て、それ以来、無性むしやうに上のぼりつめてしまったものです。

事にかこつけては薬屋へ行つて、夫婦の御機嫌ごぎげんをとり、折もあ

らば女と親しく口を利きいてみたいと、いろいろに浮身うきみをやつしているので、今ほかの連中はまた一局に夢中になる頃にも、金蔵のみは女の消え去った路地口を、じーつと見つめたまま立っています。

時は夏五月、日盛りは過ぎたが、葭簾よしずの蔭で、地はそんなに焼けてもいなかつたのに打水うちみずが充分に沁しみて、お山から吹き下ろす神風ふところが懐ふところに入る時は春先とも思うほどの心地こころがします。

「少々ものを尋ねとうござるが……」

一方は将棋に夢中で、一方は路地口に有頂天うちようてんである。

「植田たんのかみ丹後守殿の御陣屋は……」

「ナニ、植田様の御陣屋——」

金蔵はやつと、店先に立つてものをたずねている旅の人に眼をうつした。この暑いのにまだ袷あわせを着ている。手には竹の杖。

女を見て総立ちになつた閑人どもは、このたびは一人として見向きもしない。

問いかけられた当の金蔵すらも、直ぐに眼をそらして、

「植田様は、これを真直ぐに左」

鼻であしらう。

旅人は、教えられた通りにすつくと歩んで行く。これはこれ、昨夜を長谷はせの籠堂こもりどうで明かしたはずの机竜之助でありました。

三

長谷から三輪へ来たのでは後戻りあともとどになる。

関東へ帰るつもりならば、長谷の町の半ばに「けわい坂」というのがあつて、それを登ると宇陀郡萩原の宿へ出る、それが伊

勢路へかかつて東海道へ出る道であるから、当然それを取らねばならぬ。竜之助が、この三輪まで逆戻りをして来たからには、関東へ帰る心を抛なげうつたのであろう。また京都へ帰る気になつたのかも知れぬ。いや、そうでもない、彼は今や西へも東へも行詰まつている。立往生たちおうじょうをする代りに、籠堂へ坐り込んで一夜を明かした、が、百八煩惱ぼんのうを払うというなる初瀬はつせの寺の夜もすがらの鐘の音も、竜之助が尽きせぬ業障ごうしょうの闇に届かなかつた。迷いを持って籠堂に入り、迷いをもつて籠堂を出た竜之助は、長谷の町に来て、ふとよいことを聞いた。

これから程遠からぬ三輪の町に植田丹後守という社家しゃけがある——武術を好んでことのほか旅の人を愛する、そこへ行つてごらんさいと、長谷の町の町はずれで、井戸の水を無心しながら、このあたりに武術家はないかと、それとなく竜之助が尋ね

た時に煙草を刻きざんでいた百姓が教えてくれた。竜之助は、ともかくもその植田丹後守なる三輪大明神の社家を訪ねてみる気になつて、ここまでやつて来たものです。

教えられた通りに来て見ると、これは思ったより宏大こうだいな構えである。小さな大名、少なくとも三千石以上の暮らし向きに見える。竜之助は入り兼ねていささか躊躇ちゆうちうした。

というのは、自分のこの姿が、いまさらに気恥かしくなつたからです。このなりで玄関へかかったところで、誰が武術修行者として受取つてくれるものか、きわめて情け深い人で、いくらかの草鞋わらじせん銭せんを持たして体ていよく追つ払うが関の山、まかり間違えば、浮浪人として突き出される。

いったん竜之助は通り過ごして若宮の方へ行き、また引返したが、別に妙案とてあるべきはずがない。

「頼む——」

思いきつて、そのまま玄関からおとなう。

「どーれ」

十八九の青年が現われて来て、竜之助を見る、その物腰ものごしが武術家仕込みらしく、竜之助の風采ふうさいに多少の怪しみの色はあつても侮あなどりの気色けしきが乏しいから、

「御主人は御在宅か。拙者は仔細しさいあつて姓名はここに申し難がたけれど、京都をのがれて、旅に悩む者。御高名をお慕い申して……」

「心得こころえてござる、暫時ざんじこれにお控まえ下さい」

青年の呑のみ込みぶりは頼もしい。竜之助はしばらく待っている
と青年は再び現われて、

「いざ、お通り下され、ただいま洗足せんそくを差上げるでござりましたよ
う」

案ずるより産むが安い。さすがの竜之助もその心置きなき主人の氣質がしのばれて、この時ばかりは涙のこぼれるほど嬉うれしかった。

四

植田丹後守には子というものが無い、ことし五十幾つの老夫婦のほかこおりやまに、郡山の親戚から養子を一人迎えて、あとは男女十余人の召使のみで賑にぎやかなような寂しい暮しをしております。

子というものを持たぬ丹後守は、客を愛すること一通りでない、いかなる客であつても、訪ねて来る者に一宿一飯を断わつたことが無い——それらの客と会つて話をするというよりは、その話を聞くことが楽しみなのである。

客の口から、国々の風土人情、一芸一能の話に耳を傾けて、時々会心の笑を洩らす丹後守の面には聖人のような貴さを見ることもあります。けれども、ただ客を延いては話を聞くだけで、丹後守自身には何もこれと自慢めいた話はない。

人の言うところには、丹後守は、弓馬刀槍の武芸に精通し、和漢内外の書物を読みつくし、その上、近頃は阿蘭陀の学問を調べていると。なるほど、丹後守は幼少からこの邸を離れたことがなく、ほとんど終日、書齋に籠りがちで、祖先以来伝えられた和漢の書物と、自分が買い入れた書物とは、蔵にも室にも山をなしているのであるから、一日に五冊を読むとしても、仮りに五十年と見積れば十萬冊は読んでいる勘定になります。

武芸に至っては、どうも怪しい。家には先祖から道場があつて、これも幼少の頃から、宝蔵院の槍、柳生流の太刀筋をこと

に精出して学んだとはいうが、誰も丹後守と試合をした者もなし、表立って手腕を表わした機会もないから、事実どのくらい出来るやを知っているものはないのです。

ただ一度、どこかの藩の権者が、この三輪明神の境内へ逸り切った馬を乗入れようとした時に、通り合せた丹後守がその轡づらを取り、馬の首を逆に廻したことがある——馬上の武士は怒って、鞭を振り上げて丹後守を打とうとした時に、何のはずみか真逆さまに鞍壺から転げ落ちて、馬は棹立ちになった。

なにげなき体でそのまま行き過ぎる丹後守の後ろ姿を見て、落馬の武士も、附添の者も、これを追いかける勢いがなかった、それを町の者が見て舌を捲いたことがある。それ以来、「御陣屋の大先生」の武芸を疑うものがなくなった。

机竜之助は、この人にはじめて会って見ると、父なる弾正の

おもかげ
面影をしの憊なつかぼずにはいられなかつた。なんとなく威光のある、そ
うして懐なつかしい人柄ひとがらだと、荒すさびきつた机竜之助の心にも情けの露
が宿る。

「これは仕しあわ合せなことじゃ、どうか暫らくこの道場を預かつて
いただきたい」

丹後守は、道場へ出て竜之助の試合ぶりを見てこう言うた——
この道場にはべつだん誰といって師範者はないけれど、丹後守
の邸には、召使のほかにも、いつも五人十人の食しよつかく客がいる。多く
は浪人者で、そのほか、国々や近在から、武芸修行者が絶えず
集まって参ります。

見も知らぬ浮浪人を、快く家に通すさえあるに、その技倆を信じて、己おのが道場を任せて疑わぬ丹後守の度量には、机竜之助ほどの僻ねじけた男も、そぞろ有難涙ありがたなみだに暮れるのであります。竜之助は再びここで竹刀しなひをとつて、人を教える身となります。何から言うても、よくもとの身の上に似ている、丹後守を父として見る時に、竜之助には更に強く強く親の慈悲というものがわかつてくるのであります。いかに物事に不自由がなくても、子のない人には、消して消せない寂しさがあります。

われ一人を子に持つて、三年越しの病の床から、勘当を言い渡さねばならなかつた父弾正の胸の中はどんなであつたらう——
いってつ 一徹がんこの頑固な父とのみ見ていた自分の眼は若かつた。このごろでは竜之助も、東に向いて別に改まつて手を合わすようなことはせぬけれど、ひそかに襟えりを正して、父の上安かれと祈ること

もたびたびであります。

彼は、このしおらしき心根こころねから、おのずと丹後守に仕える心も振舞ふるまいも神妙になる——もともと竜之助は卑いやしく教育された身ではない、どこかには人に捨てられぬところが残っているであろう、丹後守夫婦は竜之助を愛してなにくれと世話をします。ここへ来てから三日目の夕べ、竜之助は三輪明神の境内を散歩して、うかうかと、かの薬屋源太郎の裏道の方へ出てしまいました。

竹の垣根があつて、かなりに広い庭の植込から、泉水のひびきなども洩もれて聞えます。庭の方は大きな構えで、燈火あかりが盛んにかがやいて客や女中の声がかましいのに、この裏庭は、垣根一重を境にして、一間ほどの田圃道たんぼみちにつづいては、威勢よく今年の稲が夕風に戦そよいで、その間に鳴く蛙かわずが、足音を聞いては、

はたはたと小川に飛び込むくらいの静かきです。

竜之助は、この田圃道を通つて見ると、その垣根のところ
黒い人影がある——夏の夕ぐれはよく百姓たちが田の水を切つ
たり、または漁具を伏せて置いてうなぎどじょう鰻や鱒などを捕るのであるか
ら、大方そんなものだろうと思つたと、その人影は、垣根の隙か
ら庭の中を一心に覗いてのぞいたが、どう思つたか、人丈ひとたけほどな垣
根を乗り越えて、たしかに中へ忍び入ろうとします。しかも穩おだや
かでないことは、あまり目立たない色の手拭か風呂敷を首に捲
いて面をつつんでいることでもあります。

竜之助は近寄つて、何の雑作ぞうさもなく、いま中へ飛び込もうと
する足をグツと持つて引っぱると、たあいもなく下へ落ちまし
た。

落つこちた男は、

「この野郎」

いきなりに竜之助に武者振りついて来たのを、竜之助は無雑作に取って、田の中へ投げつけた。

投げつけられても、稲の茂った水田みずたの中ですから別に大した怪我けがはなく、暫らくもぐもぐとやって、泥だらけになって起き返ると、

「覚えてやがれ」

田の中を逃げて行きます。

こぬすつと
小盗人！

もとより齒牙しがにかくるに足らず、竜之助は邸へ帰った時分には、そんなことは人にも話さなかつたくらいですから道で忘れてしまったものと見えます。けれどもこれ以来、忘れられぬ恨うらみを懐いだいたのは投げられた方の人であります。

泥まみれになつて自分の家の井戸側へ馳せつけたのは、かの
藍玉屋あいだまやの金蔵で、ハツハツと息をつきながら、

「口惜しい！ 覚えてやがれ、御陣屋の浪人者！」

吊り上げては無性に頭から水を浴びて泥を洗い落して、

「金蔵ではないか、何だ、ぎぶぎぶと水を被つて」

親爺おやじが不審がるのを返事もせずに居間へ飛び込んで、

「早く着替きがえを出せ、寝巻でよいわ、エエ、床を展のべろ、早く」

さんざんに下女を叱り飛ばして、寝床へもぐつて寝込んでし

まいました。

この藍玉屋は相当の資産家であるから、その一人息子である
金蔵が、まさか盗みをするために人の垣根を攀よじたわけでない
ことはわかつています。竜之助のために蛙を叩きつけられたよ
うな目に会い、幸い泥田であつたとはいえ、手練しゅれんの人に如法によほうに

投げられたのですから体の当りが手強い。

痛みと、怒りと、口惜しきで、その夜中から金蔵は齒齧みをなして唸り立てます。

「覚えてやがれ、このごろ来た御陣屋の瘦浪人に違いない」

金蔵の親爺の金六と女房のお民とは非常な子煩悩でありまし

た。一人子の病み出したのを気にして枕許につききり、医者よ

葉よと騒いでいましたが、今ようやく寝静まった我が子の面を、

三つ児の寝息でも窺うように覗きながら、

「ねえ、あなた、今ではこの子も自暴になつていたのでござい
ますよ」

「そうだ、そうに違いない。それにしても、あの薬屋の奴は情
を知らぬ奴だ」

「ほんとにそうでございますよ、あんな心中の片割れ者なんぞ、

誰が見向きもするものか、この子が好いたらしいというからこそ、人を頼んだり、直接じかにかけ合ったり、下手したでに出ればいい気になつて勿体もったいをつけてき、それがためにこの子が焦じれ出して、こんな病気になるのもほんとに無理がありませんよ」

「困つたものだ——」

子に甘い親二人は、わが子には少しも非難の言葉を出さず、なにか、やっぱり人を怨うらんでいるようである。

これはたあいもないことです。金蔵はお豊を見染めて、それを嫁に貰つてくれねば生きてはいないと、親たちに拗すねて見せる——そうして親をさんざんに骨を折らせたが、思うようにいかない。今夜も、そつと垣根を越えて、お豊のいる離れ座敷まで忍んで行こうとしたところを、竜之助に引き落されて投げられた。

まことにばかげた話であるけれど、世に怖るべきは賢明な人の優良な計画だけではない、執念のしゆうねん一つは賢愚不肖となく、こじれると悪い業をわざします。

六

お豊は、月のうち三度は三輪の神杉をかみすぎを拝みに行く。

三輪の大明神には、鳥居と楼門と拝殿だけあつて本社というものが無い。古典学者に言わせると、万葉集には「神社」と書いて「モリ」と読ませる。建築術のなかつた昔にも神道はあつた、樹を植えて神を祀まつつたのがすなわち神社である——この故に三輪の神杉には神霊が宿る云々。うんぬん

みもろやま三諸山から吹いて来る朝風の涼しさに、勅使殿や切掛杉きりかけすぎにた

かつていた鳩ほとは、濡しめっぽい羽はばたきの音をして、悠々と日当りのよい拝殿の庭へ下りて来て、庭に遊んでいた鶏まじの群に交まじる。

「お早うございます」

豆まめを売る婆ばあさんは、もう店を出して、お豊の来たのに向うから挨拶あいさつをします。

「お早うございます」

お豊も返事をして、いつもの通り、豆を買って鳩ほとに蒔まいてやります。鳩ほとが豆皿まめを持ったお豊の手首や肩先に飛び上って、友達とも気取りに振舞ふるまうのも可愛らしい。鶏まじが遠くから居候いそろうぶりに出て来て豆まめを拾ひろう姿も罪がない。

お豊おとよの面かおに、いささかの頬笑ほおえみの影が浮ぶのであります。

拝殿はいでんの前まえから三輪の御山ごさんを拝かむ。

御山ごさんは春日かすがの三笠山さんかさと同じような山一つ、樹木がこんもりと

して、朝の巒らん気が神々こうじうしく立ちこめております。

若い女の人で三輪大明神を拜みに来る人は、たいてい帰りに、
楼門わきの右の脇の「門杉かどすぎ」に願がんをかけて行く。

三輪ななすぎの七杉ななすぎのなかの「門杉」の故事は、ここにいえば長い。

我が庵いほは三輪の山もと恋しくば

ともなひ来ませ杉立てる門かど

の歌がそれです。

お豊は、その門杉には別に願いをかけることもなく、楼門の石段を下りても、その方へは別に足を向けなくて、宝永三年、大風のためにその一本を吹き折られた名ばかりの二本杉の方へ参ります。

一人は死に一人は助かる運命が、ちようどこの二本杉のよう
だと思われのお豊には、三輪の七つの神杉のうち、この二本杉ば

かりを拝みたい。一つには、この杉に願いをかければ、いつた
ん夫婦の契ちぎりを結んで一方の欠けた人々には、この上なき冥福めいふく
があるという——かの門杉は縁を結ぶの杉で、この二本杉は縁
の切れた杉である。

一いつは青春の子女に愛せられ、一は寡独かどくの人に慕われる。

吹き折られた杉の傷のあととは、まだ癒いえない。そこから辛かろう
じて吹き出した芽生えを見ているお豊の面には痛々しい色があ
ります。

七

机竜らんぎ之助も、ふとこの朝、植田の邸を出て、爽さわやかな夏の朝
の巒らんぎ気を充分に吸いながら、長者屋敷の方を廻まわって、何の気も

なくこの二本杉のところまで来かかったのでありました。お豊はその足音に気がついて、人目を避けたい身の上ですから、隠れるようにそこを立去ろうとしたが、杉から右の方、二間ばかりのところ、じつと立ち止まって、こちらを見ていた竜之助の面を一目見たが、我知らずまた見直すのでありました。

二人の面と面とが、まともに向き合わせられた時に、お豊は、「あの、あなた様は……」

何かにおさ圧えられたように、こう言つてしまいました。

「あ、関の宿しゆくでお見受け申した……」

竜之助は、お豊の姿からちつとも眼をはなさずに、ずっと近寄つて来ます。

「はい、あの節は難儀をお助け下さいまして」

「ああ、そうであつたか、実はどこぞでお見かけ申したようじゃ

と、さいぜんからここで考えておりました」

「存じませぬこと故、甚だ失礼致しました」

「いや、拙者こそ……」

竜之助は、いつもの通り感情の動かない顔で、

「しかし、そなた様をこの世でお見かけ申そうとは思わなかつた」

「え……」

「あの若い、おつれの方はかたどうしました」

お豊は露出むきだしにこう言いかけられて面が真紅まっかになります。わが

隠し事を腸はらわたまで見透かされた狼狽ろうばいから、俯向うつむいてしまつてにわ

かには言葉も出ない、足も立ちすくんでしまつた様子であります。

「まことに、お恥かしゆうございます。それではあなた様には、

何もかも」

「いや、何もいつこう知りませぬが、そなた様だけはこの世にない人と思つておりました」

「生きて生き甲斐のない身でございます、お察し下さいませ」

お豊は、ハラハラと涙をこぼして言葉もつまつてしまつたのであります。

それを気の毒と見たか、哀れと思つたか竜之助は、

「縁あらば詳しいお身の上を聞きもし語りもしましょう。して、そなた様は今どこにおられます」

「はい、この土地の薬屋と申す旅籠屋が伯父に当りまして」

「はあ、薬屋……拙者はこの植田丹後守の邸におります」

そのまま竜之助はサツサと楼門の方をさして通り過ぎてしまいました。

お豊は思いがけぬところで、思いがけない人に会い、思いがけない言葉を浴びせられて、しばらくなんだか夢中になってしまいました。

何という素気そっけない人であろう！ 気がついて見ると竜之助は、第二の石段をカタリカタリと下駄の音をさせながら、わき目もふらず祓殿はらいでんの方へと下りて行きます。

八

関の宿で悪い駕籠屋かごやに苦しめられたのを見兼ねて追い払ってくれた旅の武士さむらいはあの人であった。あれだけの縁であると思つたらば、ここでめぐりあつたあの武士が何もかもいちいち自分の身の上を知っているようである。

関の地蔵に近い宿屋に、真三郎と一夜を泣き明かして、さて
亀山の実家へは帰れず、京都へ行くつもりで、鈴鹿峠を越えて、
大津の宿屋まで来ると、もう行詰まつて一人は死ぬ氣になつた。
遺書かきおきを書いて、二人の身を、三井寺に近い琵琶湖の淵ふちへ投げた
が、倉屋敷の船頭に見出されて——男をひとり常久とわの闇に送つ
て自分だけ靈魂を呼び返される。今となつては、死ぬにも死ぬ
ず、この生きたぬけがらを、昔の人に遇わせることが、あまり
といえは浅ましい。お豊は、しばらく立去り兼ねて涙を押えて
いましたが、

「お豊さん、お豊さん」

二本杉の後ろに声がある。

「はい——」

お豊は驚いて涙をかくすと、藍玉屋あいだまやの金蔵が、いつ隠れてい

たか杉の蔭からそこへ出ています。

「何か御用でございますか」

「あの、お豊さん、この間わたしが上げた手紙を御覧なすつたか」

「いいえ」

「見ない？ 御覧なさらない？」

金蔵の様子が、なんともいえず気味が悪いので、

「あの、今日は急ぎますから」

「まあ、お待ちなさい」

金蔵は、お豊の袖を抑おさえて、

「その前の手紙は……」

「存じませぬ」

「その前のは……」

「どうぞ、お放し下さい」

「では、あれほどわたしから上げた文を、あなたは一度もごらんなさらないか」

「はい、どうぞ御免下さい」

袂たもとを振り切つて行こうとする時に、金蔵の面が凄かおいほど険すじしくなつていたのに、お豊はぞつ、として声を立てようとしたくらいでしたが、

「わたしは、日蔭者の身でございますから、御冗談ごじょうだんをあそばしてはいけません」

お豊は、丁寧ていねいに詫わびをして放してもらおうとすると、金蔵は蛇へびがかからみつくように、

「お豊さん、お前は、今ここで何をしていた、あの武士さむらいは御陣屋いそらうの居候いそうろうじゃ、それとお前は、ここで出会うて不義ふぎをしていたな」

「まあ——何を」

「そうじゃ、そうじゃ、それに違いない、お前は浪人者と不義をして神杉を汚けがしたと、わたしはこれから触れて歩く」

金蔵はわざと大きな声で呼び立てます。お豊は力いっぱい振り切つて逃げ出すと、追いかけてもしないで金蔵は、

「覚えていろ」

九

「お豊や」

伯父に当る葉屋源太郎は、お豊を自分の前へ呼び寄せて、

「困ったことが出来たで。お前も承知だろう、あの藍玉屋の金

蔵どうらくむすこという遊蕩息子むすこじゃ」

「はい」

金蔵に弱らせられているのは、お豊ばかりではなく、伯父夫婦も、あの執念しゆうねんぶが深い馬鹿息子には困り切っているのであります。

「このごろは、まるで氣狂いの沙汰じゃ、なんでもひどくわしを恨んで、ここの家へ火をつけるとか言うているそうじゃ」

「まあ、火をつける——どうも伯父様、わたしゆえに重ね重ね御心配をかけまして、なんとも申し上げようがござりませぬ」

「ナニ、心配することはない、たかの知れた馬鹿息子の言い草じゃ。しかし、ああいうやつがのぼせあが逆上ると、どういふことをしでかすまいものでもない、まあ用心にし如くはなしと申うて、わたしはよいことを考えた」

「はい」

「それはな、しばらくお前をここの家から離しておくのじゃ。」

というて滅多めったなところへは預けられないから、わしもいろいろ考えた上に、とうとう考え当てたよ」

「伯父様、わたしは、もうこのうえ他所よそへ行きとうござりませぬ、わたしのようなものはいっそ、ここで死んでしまった方が、身のためでございます、皆様のおためでございます」

お豊が死にたいというのは口先ばかりではないのです。死ねば、親にも親戚にも、この上の恥と迷惑をかけねばならぬことを思えばこそ味気あじきなく生きながらえているので、ほんとうに自分も死んだ方がよし、人のためにもなるであろうと、いつでも覚悟は出来ているくらいなのですが、伯父は、そんなには見えないので、

「いや、お前などは、まだこれからが花じゃ。ナニ、お前の前だが、若いうちの失敗しくじりは誰もあることじゃ、そのうちには自分

も忘れ、世間も忘れる、その頃ころあ合あいを見計らつて、わしはお前をつれて亀山へ行き、詫わび言ごとをして、めでたく元へ納めるつもりだ、暫らくの辛抱だよ」

伯父はひとりで力を入れて嬉しがっているようでしたが、

「その、お前を暫らく預けておこうとわしが考え当てたのは、なんの、手もないこと、ついこの先のお陣屋じゃ。植田丹後守様とずりよう受領うりようまである歴々の御社家、あの御主人はなかなか豪えらいお方で、奥様も親切なお方、あのお邸へお願い申しておけば大盤石だいばんじやく。それでわしは今、御陣屋へお願いに上つたところ、御先生も奥様も早速御承知さつそくじや。御陣屋の後立うしろだて、丹後守様のお眼の光るところには、この界限かいがいで草木も靡なびく、あんな馬鹿息子の指さしもなることではない」

お豊はこれを聞いて、かの二本杉であった机竜之助が、同じく

その植田丹後守の邸に在るといふことを思い出して、その面影おもかげがここに浮んで来ました。

十

今宵こよいは三輪大明神に「一夜酒ひとよざけの祭」といふのがあります。

丹後守の家では二三の人が残かぐらったきりで、あとは皆、昼からの引続かぐらいての神樂と、今年ほたるは螢を集めて来て階段の下から放つという催しを見に行つてしまつています。

その残かぐらつたなかの男の一人は、机竜かぐら之助で、もう一人は久助という年古く仕えた下男であります。

竜之助は縁端えんばなへ出て、久助がさきほど焚たきつけてくれた蚊遣火かやりびの煙を見ながら、これも先刻、久助が持つて来てくれた三輪の

酒を、チビリチビリと飲んでいました。

いつでも寝られるようにと、久助は蚊帳の一端を吊りつばなしにしておいて、蒲団ふとんなども出しておきました。籠行燈かごあんどんの光がぼんやりとしているところで、竜之助は盃をあげながら、「なるほど、この酒は飲める、処柄ところがらだけに味が上品である」と独言ひとりごとを言います。

三輪の酒は人皇にんのう以前からの名物である。ここにまた古典学者の言うところを聞くと、

「ミワ」は、もと酒を盛る器うつわの名であった、太古、三輪の神靈はことに酒を好んで、その醸造の秘術をこの土地の人に授けたという。また一説には「ミワ」は「水曲みわ」である、初瀬川の水がここで迂廻うかいするところから、この山にミワの山と名をつけた、それが社の名となり、社を祭る酒の器の名となった、土地の名

になつたのはその後である——かの万葉に謡われし、

うま酒を三輪の祝はふりのいはふ杉

てふりし罪か君にあひがたき

とある——また古事記の祭神の子が活玉いくたまよりひめ依姫かよに通つたとある——甘美にして古雅な味が古くから湛たえられているといふことは、三輪のうま酒の誇りであつた。

竜之助は、そんな考えで飲んでいゝるのではない、舌ざわりの、とろりとして、含んでいゝうちに珠玉たまの溶けてゆくような気持ちを喜んで、一杯、一杯と傾けていゝる——蚊遣火かやりびの烟けむりが前栽せんざいから横なびに靡なびき、縦に上るのを、じつと見ていゝる様子は、なんのことはない、蚊遣火かやりびを肴さかなにしていゝるようなものです。

「誰か湯に入つていゝるな、お早どのかな」

湯殿で湯の音がする。廊下をずつと突き当ると、鍵かぎの手に廻てつ

たところに物置と背中合せに湯殿がある、それは女たちの入る湯殿である。いつも、こんな時には留守居役の老女中、お早婆さんが、居いねむ睡り半分、仕舞湯しまいゆに浸つかっているはずである。

「ウム、太鼓の音がするな、里神楽さとかがらの太鼓——子供の時には、あの音にどのくらい心を躍おどらせたことであろう」

笛と太鼓の音は、すぐ前の竹藪たけやぶにひびいて遠音とおねながら手にとるようです。竜之助は、それから沈吟しんげんして、盃さかをふくんでいると、庭先つばきを向うの椿つばきの大樹の下から、白地の浴衣ゆかたがけで、ちらと姿を見せたものがあります。

「婆おばさんか」

竜之助は見咎みとがめて呼んでみますと、

「いいえ、わたくしでございます」

「ああ、あの、お豊どのか」

「はい」

お豊は、この家に預けられています。竜之助はそのことを知っていた。お互いに同じ家に来り合きたせたことをその時から知ってはいたが、今日で五日ほど、人の手前を憚はばかつてまだ親しくは面かお合せず口も利かずにいた。

「そなた様もお留守居でござったか、まあ、ここへお掛けなされ」

竜之助は、自分の持つていた団扇うちわで縁の一端を押えます。

「有難う存じます、こんな失礼な容姿なりで……」

いま湯の音を立てていたのは、この女であった。湯あがりに、ちよつと身じまいをして、寛くわろいだ浴衣がけの姿に気を置いて、少し落着かぬように、まだ縁へは腰を下ろさないで、団扇を片手で綾あやなしながら、ちよつと蚊遣火の方に眼をそむけた横顔を、

竜之助はちらと見て、むらむらと過ぎにし恋の古傷に痛みを覚えるのでありましたが、すぐにいつもの通り蒼白あおしろい色を行燈あんどんの光にそむけます。

「あなた様も、お留守居でございましたか。先日はどうも……」
「あれから、なんとなく、まだ話し残しがあるような。ほかに御用向がなければ……暫しばしそれへおかけなさい」

「はい、有難う存じます。こちら様へ上りましてから、まだ御挨拶も申し上げませぬ、済みませぬと思いましたが、つい人目がありますので……」

お豊は、竜之助に向って何か言ってみたいようでもあるし、言い淀よどんでいるようでもあります。

「実は拙者も……」

竜之助は取ってつけたように、こう言つて、またお豊の横顔

を見ながらしばらく黙っていましたか、

「拙者には兄弟はないが、どうやら死んだ家内にでも会うよう
な……そなた様を見てから、そんな気分も致すのじゃ——これ
はあまり無駄ぶじつけながら、不思議なめぐり会いが、ただごとでない
ように思う」

「何かの御縁でございましょう。あの、あなた様にはそのうち
関東の方へお立ちと聞きましたが、それはほんとうでございま
すか」

「うむ、拙者の身の上も……いろいろなこころに変わるので。どうやらこ
のごろでは、この土地に居つきたい心地こころもする、当家の御主人
があまりに徳人とくじんで、父に会うたように慕わしくも思われるから。
しかし、そのうち立たねばなりません」

「さだめし、お国では奥様やお子供様がお待ち兼ねでございま

しよう」

「いや、拙者に女房はない、もとはあつたが今はない、子供は一人ある——父親も一人」

カラカラと冴さえた神楽太鼓かぐらだいこの音が、この時、竜之助の腸はらわたに沁しみて、団扇うちわを取り上げた手がブルブルとしびれるように感じます。

どうかすると、世間には竜之助のような男を死ぬほど好く女があります——好かれる方も気がつかず、好く方もどこがよいかわからないうちに、ふいと離れられないものになつてしまふ。

「女房はない、もとはあつたが今はない、子供は一人ある——父親も一人」

と言つて俯向うつむいた竜之助の姿を、お豊はなんともいえぬほど物哀れに感じたのであります。さてはこの人も自分と同じく、つ

れなき世上の波に揉もまれ行く身であるよ。

「それはまあ、おかわいそうに。そのお子さんはさぞ会いたく
ていらつしやるでしょうに」

「左様、年のゆかない子供の身の上というものは、どこにいて
も思いやられるでな」

「左様でございませうとも。せめてお母さんでもおありなさるこ
とならば、いくらか御心配も薄うございませうが、お一人だ
けでは……」

「ナニ、親はなくとも子は育つというから、まあ深くは心配せ
ぬけれども、道を歩いてても、その年ぐらいの子供を見かけると、
ついどうも思い出される、ハハ」

竜之助は淋しく笑う。

「ほんとに御心配でございませう。そのお子さんはおいく

つ……男のお子さんでございますか」

「数え年で四つ、左様、男の子じゃ」

「お母さんもさだめて、草葉くさばの蔭とやらで、お心残りでござい
ましよう。御病気でおなくなりになったのでございますか」

「病気ではない、自分の我儘わがままから死んだのじゃ」

「我儘から……」

お豊は竜之助の荒切りあらぎにして投げ出すような返答で、取りつ
き場のないように、言いかけた言葉を噤つぶんでいると、

「いや、そんな愚痴ぐちは聞いても話しても由よしないことじゃ」

竜之助は、団扇をとつてその墨絵をじつと見つめている。

曾かつて、島原の角屋すみやで、お松が竜之助の傍に引きつけられている
うちに、その身辺からものすごい雲がむらむらと湧き立つよう
に見えて、ゾクゾクと居ても立ってもいられないほど怖こわくなつ

たことがあります。今、幽霊も遊びに出ようとする夏の夕べを背景に、蒼白い沈んだ面の竜之助を、お豊がこちらから見ると、この人の身のまわりには、やはり何かついて廻っているものがある。

大気がにわか蒸してきた。さつきから飲んでいた三輪のうま酒の酔いがこの時に発したのか、竜之助は、ふいと面を上げると、蒼白い面の眼のふちだけに、ホンノリと桜が浮いている。

「お豊どの、そなたは酒を上らぬか、三輪の酒はよい酒じゃ」
「いいえ、わたしはいけませぬが、お酌しやくならば……」

お豊も自ら怪しむほどに言葉が碎けてきた。

蒸してきた空気のために、太鼓の音も泥をかき廻すように、竜之助もお豊も何かの力で強く押されているようです。

そうは言っただけで、竜之助は再び酒杯さかずきを手に取りとうとはせ

ず。

お豊は、こころもち膝をこちらに向けるようにして、二人は、やはり蒸し暑い空気に抑おさえられてだまつていると、蚊遣火の煙は、その間に立ち迷うて見えます。

「お豊どの、そなたも遠からず伊勢へ帰られるそうな」

「どうなりますことやら」

「さてさて世間には、身の始末に困った人が多いことじゃ」

竜之助は、このとき少しく笑う。

「生きている間は故郷へは帰るまいと思いません、帰られた義理ではありませぬ」

「なるほど……」

「伯父は遠からず連れて帰ると申しますけれど、わたしは帰らぬつもりでございます」

「して、永くこの地に留まるお考えか」

「いいえ」

「では、どこへ」

「あの、私はいつそ、生きているならばお江戸へ行つて暮らしたいと思いまする」

「江戸へ——」

「はい、江戸には叔母に当る人もあるのでございますから、それを頼たよつて、あちらで暮らしてみたいと思つておりまする」

「うむ、江戸で暮らす——それもまた思いつきじゃ」

「それにつきまして、あなた様には……関東へお立ちの時に……」

お豊は、ここまで来て言い淀よどんだようでしたが、思い切つた風情ふぜいで、

「突然にこんなことを申し上げてはさだめし鉄面あつかましいやつとおさ

げすみでもござりましようが、あなた様が関東へお下りの節……
できますことならば」

「……………」

「あの、御一緒にお伴ともをさせていただきとう存じます」

「一緒につれて行けと申されるか」

お豊を失望させるほど冷やかに、竜之助は呑込んだともつかず、いやとも言い出さず、やがて、

「それもよかろう、強しいてお止めは致さぬ」

やつとこう言い出して、少し間まを置き、

「が、そなたが江戸へ行くことは、伯父上は勿論もちろんのこと、ここ
の先生も、またそなたの御実家もみな不同意でござろうな」

「それはそうでございませけれど……もし故郷へ送り返される
ようなことになりますれば、生きてはおられませぬ」

「ふむ——」

竜之助は団扇うちわを下に置いて腕を組んでみましたが、よく生命いのちを粗末にしたがる女よと言わぬばかりの態度にも見えましたが、また極めて真剣に何か考えているようにも見えます。

そうして、しばらくつぶっていた眼をパツと開いて、

「よろしい、生命がけの覚悟ならば……」

この時、表の方で人の足音がやかましい。祭りに行っていた家の連中が帰って来たものと思われる。

十一

その翌朝のこと、藍玉屋あいだまやの金蔵は朝飯も食わずフラリと自分の家を飛び出しました。

「金さん、金蔵さん」

長者屋敷のところ、横合ひなわづついから、火縄銃かつを担いで犬をつれた獵師てい体の男が名を呼びかけたのを、も気がつかず通り過ぎようとする、獵師は近寄つて来て、金蔵の肩に後ろから手をかけ、

「どうした、金蔵さん」

「やあ、惣太そうたさん」

「何だい、えらく悄気しよげてるな」

「ああ、少し病氣だよ」

「大事にしなくちゃいけねえよ」

「だから保養に、ここらを歩いているのだ、どうも頭の具合が面白くないからね」

「それでは金蔵さん、今日は一日、俺と高円山たかまどやまの方へ行かねえか、山をかけ廻ると気の保養になるぜ」

「そんな元気があるくらいなら、こうしてぶらぶらしてはいないよ、ああつまらない」

「困るな。では俺が近いうち、猪ししの肉を切つて行くから、一杯飲んで気晴らしをしよう」

「うん」

「まあ、大事にするがいい」

この猟師は惣太といつて、岩坂というところに住み、兎、鹿、猿、狐などの獣を捕つては生業なりわいを立てている。ことに猪を追い出すのが上手じょうずで評判をとっている。女房もあつて子供も三人ほどあるのに、酒が好きで、女房子を食うや食わずに置いては、自分自分は獲物の売上げで酒を飲んで帰つてくる。金蔵とは飲み友達で、金蔵はよくこの男に奢おごつてやつたり、狐の皮なんぞを売りつけられたりしていました。今、二三間行き過ぎた惣太は、何

事をか思い出したように引返して来て、

「金蔵さん、金蔵さん」

「何だえ」

「ホントに済まないがねえ」

「うん」

「二分ばかり貸してもらいてえ。高円山へ追い込んだ猪が明日の朝までには物になるんだ、そうすれば直ぐだ、直ぐ返すから」

「またかい」

「ナニ、今度はたしかだよ。どうも金蔵さん、女房が干物ひものになる騒ぎだからな」

「貸してあげてもいいがね」

「そうして下さいよ、拝みまさあ。お前さんなんぞは何不自由のない一人息子だから、二分ぐらいは何でもあるまいが、こち

とらの身にとると、その二分が親子五人の命の種いのち たねになるんだから」

「では、二分」

金蔵は懐ろから財布さいふを取り出して二分の金をつまみ、惣太の出した大きな掌てのひらに載せてやりました。

「有難え、ありがてえ」

惣太はおしただいて、また少し行くと、今度はその後ろ影を見ていた金蔵が何か思い出したように、

「惣太さん——」

「何だい」

「お前、鉄砲を持ってるね」

「猟師に鉄砲を持ってるねと念を押すのもおかしなものだね、この通り持ってるよ」

「その鉄砲というやつは、素人しろうとにも撃てるものかい」

「そりゃ、撃てねえという限りはねえが」

「どのくらい稽古したら覘ねらいがつくんだい」

何を考えたものか金蔵は、それから毎日のように岩坂の惣太が家へ鉄砲の稽古に出かけます。

惣太の鉄砲を借りてはま的を立てて、しきりにやっているのです、少しづつは物になります。今日は三発とも的に当たったので、得意になって、四発目に裏山のもみ樅の枝にたかつていた鴉からすに覘ねらいを定めて切つて放つと見事に失敗しくじつて、鴉は唾あ々とも言わず枝をはなれてしまったから、

「駄目駄目」

惣太は傍から、ニヤリニヤリと笑い、

「生き物は、まだ早い」

「それでも鴉ぐらい」

金蔵は口惜くやしそうです。

「鴉ぐらいがいけない、鴉ほど打ちにくい鳥はないのだ、鴉が打てたら、鉄砲は玄人くろうとだよ」

「そうかなあ。いつたい、鳥では何が打ちよいのじゃ」

「そうさ、お前さんの打ちよいのはそこにいる」

「ばかにしている、あれは鶏じゃないか、雉きじ子か山鳩あたりをひとつ、やってみたいな」

「雉きじ子をひとつ、やってごらんさい、二三日うちに山へつれて行って上げます」

「雉子が打てれば占めたものだ、それから兎、狸、狐、猪、熊

——」

「そうなるよ、こちとらが飯の食い上げだ。しかしこの間、曾爾そにの山奥では、猪と間違えて人を打った奴があるそうだ。金さん、お前もそんなことになるといけねえから、わしの見ぬところでえんしょう煙硝いじりは御免だよ」

「猪と間違えて人を撃つのは勘平かんぺいみたようなものだが、惣太さん、人を撃つのはよっぽどむつかしいものかい」

「俺も永年、猟師をやっているが、まだ人間を撃つたことはねえ……」

十二

夜も四ツに近い頃、三輪明神の境内には、もはや涼みの人もまれになった時分、「おだまき杉」の下に、一つの黒い人影があ

ります。

手に持っていた小さい徳利とくりを下に置いて、鑿のみのようなもので、しきりに杉の根方ねかたを突つついていました。いかげんに突つついてみてから、その徳利を穴へあてがってみて、また突つつき直します。杉の根方は、盤屈ばんくつして或いは蛇のように走り、或いは墓がまのような穴になつている、その間を程よくとり拡げて、徳利を納めるために他目わきめもふらず突つついていましたが、ふいと、また一つの物影が、地藏堂の方からゆつくりと歩んで来て、この「おだまき杉」近くまでやつて来たのにも気がつかないようです。このゆつくりと歩んで来たというのは、誰であるか直ぐにわかる。それは、寝る前に必ずひとたびは、明神の境内をめぐつて歩く植田丹後守であります。

丹後守は、いま「おだまき杉」の近くへ来て、ふと、根方を

突っついている忍びの人影を見つけたので歩みを止めて、何者が何をするかと、しばらく闇の中から、立って見ていました。

丹後守の歩き方は、まことに静かで、草履ぞうりをふんで歩く時は、歩く時も、止まる時も、さして変りのないほどでしたから、根方の人は少しも気がつきません。

しばらく見ていたが、つかつかと丹後守は近寄って、

「金蔵ではないか」

「はい——」

物影は非常なる驚きで、バネのように飛び上ったのですが、わなわなと慄ふるえて逃げる気力もないもののように見えます。

「何をしている」

丹後守は、押して穏かに問う。

「へえ……へえ」

「それは何じゃ」

人影が藍玉屋の金蔵であることは申すまでもありません。

丹後守に指さされたのは金蔵が、幾度も穴へ入れたり出した
りしてみた、かの徳利でありました。

「へえ……これは……」

「これへ出して見せろ」

「へえ、これでございますか……これは」

金蔵はおそろおそろ徳利を取って、丹後守の前へ捧げます。
丹後守は、手に取り上げて見ると徳利のように見えても徳利で
はありません。長さおよそ一尺ぐらい、酒ならば一升五合も入
るべき黒塗り革製の弾薬入れであります。

「金蔵、これはお前のか」

「はい……」

「お前は、鉄砲を持っているか」

「いえ……人から借りました」

「借りた——飛び道具は危ないものだぞ、これはわしが預かる」

「へえ……」

「もう、あるまいな、まだこんな物が家にあるか」

「もう、ありません」

「よし」

丹後守は弾薬入れを取り上げて、小言こごとも何も言わずに行つて
しまいます。

この附近では丹後守に会つては、「左様でございます」とい
か、「左様ではございませぬ」というか、二つの返事のほかは、
あまり物を言えないことになっています。丹後守が少しも強圧
を用いるわけではないが、自然そんな具合になっていました。

ああ、悪い人に悪い物を見つかった。

さすがの金蔵も、慄え上つて、身を支えることもできないで、松の幹へしが、みついてしまいました。

金蔵は猟師の惣太の手から、旧式の種子ヶ島を一挺、手に入れて、その弾薬は滅多な家へは置けないから、ここへ隠しに来たものです。町人が鉄砲を持つことは禁制であります。これが表向きに現われる時は、打首か追放か、我が身はおろか、一家中にまで……こんなところへ弾薬を隠しに来るほどの考えなしでも、その罪科の容易ならぬことは弁えています。

証拠物件は押収されてしまった——

「ああ、首を斬られる！　今夜にも俺は縛られて打首になるのだ！」

金蔵は恐怖極まって地団太を踏んでみました。

いつぞや、あの初瀬河原はつせがわらで盗人が斬られて曝さらされたことがある。俺は面白半分に見て来てたが、斬られたあとの首から、ドクドクと血が湧き返るのを見てから当分飯がまずかった、俺も明日はあんなになるのだ——ああどうしよう、どうしよう。

無知な者は、罪を犯おかす時まではそんなに大それたことと思わないでいて、犯した時に至って初めて、その罪の大きかったのに仰天ぎょうてんする。金蔵は、いちずに何をか怨うらみ恨うらんで鉄砲を習い出しましたが、今が今、その企くわだての怖おそろしさに我と慄おそえてしまったのです。

「どうしよう、どうしよう」

そこで一人で踊り廻っているのでしたが、こういう人間は、いいかげん怖れてしまうと、あとは自暴やけになります。

「どうなるものか、お豊を隠したのは、あの丹後守だ、おれの

鉄砲を知っているのも、あの丹後守だ、みんなやつつけちまえ、どのみち、おれの命はないものだ」

金蔵は横飛びに飛んで自分の家へ馳せ帰りましたが、その晩のうちに親爺おやしの金を一風呂敷と、自分が秘蔵の鉄砲を一挺持つて、どことも知れず逃げ出してしまいました。

翌朝になつて、金六夫婦の驚きは一方ひとかたでない、近所組合の人も総出で騒いだが、結局、金蔵の行方は更にわかりません。

丹後守はかの弾薬のことについては、何も言わず。ホツと胸を撫なで下ろしたのは薬屋源太郎はじめ、お豊らでありましたが、あんな奴だからまた何をしでかすまいものでもない——安心したような、まだ心配が残っているような……それでも金蔵がいなくなつたので、ひとまず胸を撫で下ろしました。

金蔵がいなくなつてみれば、お豊が植田の邸に預けられる必要はなくなつた。

お豊が再び薬屋へ帰つた時には、暗い心に薄い光がさしてゐた。

竜之助は、ものの五町とは離れぬところへお豊が帰つたその晩は、どうも寝られない淋しさを感じた。

さて、お豊は薬屋へ帰つていくらもたないうちに、伯父の源太郎に向つて、亀山へ帰りたいたからと言ひ出しました。

今まで死んでも帰らぬと言ひ張つた故郷へ、今日は我から帰りたいと言ひ出したことを、伯父は思いがけなく驚いたくらいでしたけれど、当人にその心の起つたことは非常な喜びで、

「それでは、わしが送つて行つて詫わびをして上げる」

大急ぎで旅立ちの用意をはじめました。これとほとんど時を

同じゅうして机竜之助は、植田丹後守にいろいろと高恩の礼を述べて、これも関東へ発足の日取りをきめました。

出立の前の日、葉屋源太郎が丹後守へ挨拶に出て、

「あれも、お蔭をもちまして、明日、故郷へ送り返すことに致しましたから……」

一通りの暇乞いの話を聞いた植田丹後守が、

「わしがとところにおける吉田竜太郎と申される御仁ごじんが、これも近いうち関東へ立つ、次第によりて同行を願うてみたら——」

十三

式上郡から宇陀郡へ越ゆるところを西峠という。西峠の北は赤瀬やまとふじの大和富士まで蓬々ぼうぼうたる野原で、古歌に謡うたわれた「小野の

はいばら
「榛原」はここでありませう。

西峠は一名を「墨坂」という、「墨坂」の名は古代史に著^{あら}わる。「^{とだち}鳥立たづぬる^{うだ}宇陀の御狩場^{みかりば}」というのは宇陀の松山からかけて榛原より西峠、山辺郡に至るあたりを言うたものらしい。

^{いにし}古えの「^{きんや}禁野」、推古の朝の^{ちよう}朝の^{くすりがり}葉狩のところ、そこを伊勢路へかかつて東海道へ出る道と、長瀬越えをして伊賀へ行く路とが貫いて通っております。

日中は暑さを厭^{いと}い、今朝の暗いうちに馬を仕立てて、三輪を立った葉屋源太郎とお豊とは少し先に、竜之助は二人の馬から十間ほど離れて、これもやはり馬で、この西峠を越したのであります。小野の榛原には、青すすぎが多く、大きな松や^{もみ}樅が並木をなして生えています。

仰いで見ると四方に山が重なって、遠くして高きは真白な雲

をかぶり、近くして嶮けわしきは行手に立ちはだかつて、人を襲うもののように見られます。

峠の上には雲雀ひばりが舞い、木立の中では鶯うぐいすが、気味の悪いほど長い息で鳴いている。そして木の下萌したもえは露に重く、馬の草鞋わらじはびっしよりと濡れる。

竜之助は、りよじん とも旅人の心になりました。

三輪で暮らした一月半は、再びは得らるまじき平和なものでありました。竜之助の生涯に、人の情けをしみじみと感じたのは、おそらく前にも後にもこの時ばかりでありましょう。

大和の国には神かんながらの空気が漂うている、天に向うて立つ山には建国の氣象があり、地を潤うるおして流れる川には泰平の響きがある。

竜之助は、西峠の上に立った時は遙かに三輪の里を顧みて、

「さらばよ」

と声を呑んだのでありましたが、今、さきに行くお豊の馬上の姿を見ると、そこに縹渺ひょうびょうとして、また人の香においするときめくを感ずるのであります。

ちょうど西峠と榛原の間まで来た時に、向うからただ一人、旅の者がこちらを向いて足早に歩いて来ます。

細い道でしたから、並木の方へ寄つて、源太郎とお豊の馬をも避けたように、竜之助の馬をも避けて、通りすがりに旅の人は、ふと笠の中から竜之助を見て、棒のように立ってしまいました。

この時、林の茂みと小土手の間に二人の獵師が身を隠して、

何か獲物えものを覘ねらつてゐるような様子を誰も気がつきませんでした。この一人は誰とも知れず、ギョツとするほど人相の悪い男で、ほかの一人は金蔵であります。

人相の悪い方は、

「金蔵、慄ふるえてるな」

「ナニ、大丈夫だ」

大丈夫だと言つてみたが争われぬ、金蔵は五体がブルブル慄えて物を言うと言つて歯の根が合いません。

「度胸どきようさだ定めに、それ、あつちから旅人が来る、あいつをひとつやつつけてみる」

人相の悪いのが、ふと木の葉の繁みから街道の遠くを見ると、ただ一人、この小野の榛原はいばらを東から歩み来る旅人があります。

「ドレドレ」

「それ、覗ねらいをつけてみる」

「うむ」

金蔵は鉄砲を取り直して構えてみたが、支え切れないと見え、小土手へ銃身を置いて、目当めあてと巢口すぐちを真直ぐに、向うから来る旅人に向けてみましたが、

「やあ、速い、速い、恐ろしく足の早い奴だよ」

なるほど、向うから来る旅人の足の速力は驚くべきものです。土手へ鉄砲を置いた時に弥次郎兵衛ほどに小さかった姿が、巢口を向けた時は五月人形ほどになり、速い、速いと驚いた時は、もう眼の前へ人間並みの姿で現われています。

「まるで、飛んで来るようだ、こりや天狗てんぐだ、魔物だ」

さすがの二人あつけが呆気にとられているうちに、眼の前を過ぎ去つて、並木の彼方かなたへ見えなくなつてしまいます。

「驚いたなあ！ 足の早い奴もあればあるものだ」

人相の悪いのが苦笑にがわらいをする。

しばらく無言で、二人は旅人が過ぎ去った方の路を、やはり木の葉の繁みから一心に見つめていたが、

「それ、来たぞ！」

「やあ、やあ」

金蔵は声と共に胸震どうぶるいをはじめました。人相の悪いのは平気なもので、

「いいかい、金蔵、よく度胸を落着けろ、それ、前の奴が親爺おやじで、後のが女だ、オヤオヤ、武士さむらいの見えぬのはおかしいぞ、とにかく、前の親爺をドンと一つ、いいか、あとはおれが引受ける」

申すまでもなく、二人が覗ねらう当とうの的まじさき先を通りかかる前のは薬屋源太郎で、後のはお豊であります。

机竜之助は、どうしたか、まだ姿を見せない。そうだ、さつき通りかかった、あの足の早い旅人と行違いになって、何か間違いでも出来はしないか。

まるきり執念しゅうねんのない者と、どこまでも執念の深い者は、どちららも始末に困ります。

金蔵の執念は、とうとうここまで来てしまった。慄えながら鉄砲の覗のぞきをつけているところを見ればおかしくもあるが、面かおの色を真蒼まっさおにして命がけの念力を現わしているところを見れば、すさまじくもあります。

「モット落着いて……馬の腹を覗え、馬の腹と人の太股ふとももを打ち貫ぬく気組みで……まだまだ、ズット近くへ来た時でいい」

傍で力をつけている人相の悪い獵師は、最初に金蔵に鉄砲を

教えた惣太とは違います。惣太は飲んだくれであつたけれど、これほどの悪い度胸はない。

これは針ヶ別所はりべつしよというところに住んでいて、表面は獵師、内実は追剥おいはぎを働いていた「鍛冶倉かじくら」という綽名あだなの悪党であります。

金蔵が、この鍛冶倉こがんの乾分こぶんとなつたのにも相当の筋道すじみちがあるけれどそれは省く。

「お豊、いいあんばいに、お天気じゃ、今夜は内牧泊りうちまきどまりとして、それまでに夕立でも出なければ何よりじゃ。おお、吉田様が見えない、どうなさつた」

薬屋源太郎は、あとをふり返つて囁ささやくと、お豊は、

「どうなさいましたでしょう」

「馬わらじの草鞋わらじでも解けたのであろう。馬子まごさん、少し静かに歩か

せておくれ」

馬を静かに歩かせて、

「あのお武家は、えらく武芸がお出来なさるとお陣屋の先生が賞^ほめていました」

「そうでございます、お陣屋へ修行者が参りましたも、手に立つ者はなかつたと、皆のお方も申しておりました」

「けれども、口を利きなさるのが、なんだかサツパリし過ぎて、そのくせ、いつでも沈んで、なんだか気味の悪いような、逞^{たくま}しいような、妙に気の置けるお方じゃ」

「それも、お家にお子供さんがいらつしやるし、奥様もおなくなりなすつたそうですから、それやこれやの御心配からでございますよう」

「そんなことかも知れぬ。しかしまあ道中も、あのお方がおいで

なさるので安心じゃ。時にあの馬鹿者の金蔵……ああいう執拗しつこい奴もないものだが、あんなのがゆくゆくは胡麻ごまの蠅はい、追剥、盗人、そんなことに落ちるのだ、心柄こころがらとはいえ、気の毒なものだ」
お豊はなんとも言わないで、また後ろをふり返ったが、竜之助の姿はまだ見えない。

「叱しツ——まだまだ」

林の茂みに覗ねらいをつけていた金蔵は、このとき赫かつとしてあわや火蓋ひふたを切ろうとしたのを、あわてて、傍に見ていた鍛冶倉かじくらが押えたのは、時機まだ早しと見たのであろう。

この日の朝、三輪の里なる植田丹後守は、しきりに胸むなさわぎがします。

丹後守という人は妙な人で、時々前以て物を言い当てること
があります。

「お前の家へ昨夜、子供が産まれはせぬか」

ある時、或る家の前へ立つてこう言うた時、その家の主人が
眼を円くして、

「大先生、まあ、どうして御存じでございます、まだどこへも
沙汰をしませんに」

「そうか、それは男の子であろうな」

「左様でございます、どうして、それがおわかりになりました」

「そんな夢を見た、なんにせよ、めでたいことだ」

といって立去ってしまったことがある。

また或る時、借金のために財産をなくしかけて、首を縊くろう
か、身を投げようかと思案しながら道を歩いている町の人に出遭でつくわ

したことがある。

「もくえもん 杓右衛門、お前は何を心配している」

「へえ……」

「お前の後ろには死神しにがみがついているぞ」

「ええ？」

男は慄ふるえ上がって後ろをふり向くと、丹後守は笑いながら、

「もう少し前へ出ると金神こんじんが待っている」

丹後守はこの男のために借金と死神を払ってやったことがあります。こんなことは丹後守にあつては珍らしいことではなく、雨が降ること、風の吹くこと、火事のあることなども前以て、よく言い当てたものです。

竜之助一行を送り出しておいて、しきりに胸さわぎがしたので、読みかけた本をふせて、丹後守は座右の筮竹ぜいちくと算木さんぎとを取つ

て易えきを立ててみました。そうして、

「内山殿、内山殿」

二声ばかり呼んでみました。

「はい」

いつぞや、竜之助を玄関に迎えたところの青年でありました。

「あのな、甚だ御苦勞だが、貴所と、それからモ一人、高江氏わづらを煩わづらわしたらばと思うが、ちよと近い所まで行つてもらいたい
のじゃ」

「承知致しました。いずれへ」

「初瀬の町から西峠の方へ急いでもらいたい、馬で飛ばしてみ
てもらいたいのだが」

「心得ました。して御用向は？」

「どうも、さいぜん送り出した、あの吉田氏と葉屋の者、あれ

がどうも気がかりじゃ、たしかまだ西峠へかかるまい、せめて、あの原を越えるまで、御両所でお送りが願いたい」

「心得ました」

「いや、まだ、お待ち下さい」

丹後守は、急いで立とうとする青年を再び呼びとめて、

「少々お待ちなさい、貴殿は鉄砲が打てましたな」

「はい、少しは」

「どうか、これを持参して下さい」

丹後守は戸棚の中から桐の箱を取り出して、打懸うちかけた紐ひもをとくと、手に取り上げたのは一挺の拳銃ピストルであります。

この時分、拳銃はあまり見たことがないのであります。しかも今、丹後守が取り上げた拳銃は、全く類の見えなかつた洋式のものであります。内山は、先生が妙なものを持つていと怪訝けげん

な面かおに、その拳銃を見つめます。内山が不思議がるのもその道理で、これは「引落し式」と名づけられた前装の六連発であります。これと同じ品が嘉永六年、ペルリ来朝の時、武具奉行ぶぎようの細倉謙左衛門に贈られたことがある。鉄砲がはじめて日本へ来たのは、天文十二年（或いはその以前）ということであるが、拳銃が日本へ来たのは、この時がその最初でありました。

今、丹後守が取り出したのは、まさにそれと同じ型のものであります。

どうして丹後守が、そんなものをいつのまに手に入れたか、それさえ不思議でありましたが、丹後守という人は、春日かすがの太占ふとまにを調べるかたわらには阿蘭陀オランダの本を読み、いま易筮えきぜいを終つて次に舶来はくらいの拳銃を取り出すという人であります。

それで、右の拳銃を右手に取り上げて眼先へ伸ばし、

「内山殿、その簾を捲き上げていただきたい」

「心得ました」

簾を上げると庭である。

「あの植木鉢をひとつ、打つてみましょう」

花壇の隅に伏せられた素焼すやきの植木鉢に硯ねらいをつけたのでありましたが、轟然ごうぜんたる響きと共に鉢は粉こに砕けます。

「いざ、これを持っておいで下さい」

内山は、呆気あつけにとられながら、丹後守の渡す拳銃を受取つて見ると、筒先は六弁に開いて、蓮はすの実みのように六つの穴があります。

「その一発はいま撃つてしまいました、あとの五発、続けざまに撃てるようになってる」

「はあ」

内山は、それを調べて二三度、構えてみましたが、

「しからば——」

と言つて立つと、

「あの、まだ奥に文四郎流の火繩ひなわがあります、高江殿にはあれを持つておいでなさるようにならうに」

「心得ました」

なんにしても大業おおぎようなこと、わずか二三の人を送るに駿馬しゅんまに乗

り、飛び道具を用意するとは。

かの足の早い旅人は、西峠を越えて来る机竜之助の馬を避けて通す途端とたんに馬上の人を見上げたのであります。

竜之助も、ふいと笠越しに見下ろすと、

「や！」

旅の人は、覚えぬ足を踏みしめたようでしたが、竜之助は別になんとも思わず、そのまま馬を進めようとすると、

「モシ、お武家様」

旅の人は、引き戻すように手をあげて呼び止めます。

「何御用か」

「あなた様は、もしや——武州沢井の若先生ではござりませぬか」

「ナニ、沢井の——」

竜之助はこの時、馬をとどめさせて、この旅の人を見据えて見ると、年の頃は五十に近かろう、百姓てい体の男で、どうも見たような男ではあるが、急には思い出せない。

右の男は、被かぶつていた笠の紐を解きかけながら、

「間違いましたら御免下さいまし、あなた様は沢井の机弾正様

の若先生、あの竜之助様ではございませぬかな」

不思議な旅の男の言い分を、じつと聞いて、

「いかにも——拙者はその机竜之助」

これを聞いて旅の男は、

「左様でございましたか、それで安心致しました。私共、あの青梅在、裏宿の七兵衛と申す百姓でございます」

「青梅の——七兵衛？」

万年橋の上で、抜打ちにその腰を斬って逃げられたことがある。その盗賊がこの七兵衛であることは、斬られた七兵衛はよく知っているが、斬った竜之助はそれを知らない。

「どこへ行くのだ」

「いや、どこへでもございませぬ、あなた様をたずねて、これへ参りました」

「ナニ、拙者をたずねて？」

「はい」

「拙者に何の用」

「その御用と申しますのは、あなた様のお生命いのちを……」

「生命を……」

ここに至つて竜之助は冷笑した。

「お驚きでもございませうが、あなた様のお生命が欲しいばかりにこの年月、苦勞を致している者があるのでござりまする。四年以前に御岳の山で、あなた様のために非業ひじょうの最期さいごをお遂げなされし宇津木文之丞様の恨みをお忘れはござりますまい」

「文之丞の恨み……」

「その恨みを晴らさんがため、文之丞様の弟御の兵馬様、あなたを覗うて、この大和の国におりまする。ここで私共があなた

様をお見かけ申したが運のつき、どうか、兵馬様と尋常の勝負をなすつて上げてくださいますし、お願いでございます」

「尋常の勝負？」

竜之助は苦笑にがわらいして、

「その兵馬とやらはいくつになる」

「ことし十七でございます」

「勝負はいつでも辞退はせぬ故、まず当分は腕を磨くがよからうとそう申してくれ」

十七の小腕こうでを以て、我に尋常の勝負を望むとは殊勝しゆしやうに似て小癩こしやくである。

「いやいや、勝負は時の運と申します。兵馬様とて、まんざらの腕に覚えがなければ、敵呼かたきよばわりは致しますまい」

七兵衛は笠をとりながら、

「兵馬様は、ただいま八木の宿しゆくにおられまする、これより八木の宿までは八里もござりましょう、私は一時いつときが間に、そこまで御注進ごちゆうしんに上りまするほどに、あなた様にも武士の道を御存じなれば、それまでこれにお控え願いたい。引返してお立会い下さるならば、八木、桜井、初瀬の河原、あのあたりで程よき場所を定めて、晴れの勝負を願いたいものでございます」

七兵衛はジリジリと押しつめるように竜之助に返答うながを促したが、竜之助は取合わず、

「勝手にせよ」

腮あごで馬子に差さしずして静かに馬を打たせようとすする。

「お逃げなさるは卑怯ひきようではござりませぬか」

七兵衛がやや冷笑を含んで言い放つと、竜之助は、

「机竜之助は逃げも隠れもせぬ、これより伊勢路へ出て、東海

道を下る。宇津木兵馬とやらにそう申せ、敵かたきに会いたくば、あとを慕うて東海道を下つて参るように。追いついたところできつなりとも望みのままの勝負」

七兵衛がなお何をか言わんとする時、林の中のどこからともなく轟然びょうぜんと鉄砲の音！ つづいて、人の絶叫！

竜之助は七兵衛を捨てて無二無三に馬を前へ走らせた。

薬屋源太郎だけ、ただ一人、道の真中に打倒れている。

その乗った馬は向うの樹の根に身震いして立っているが、馬子の姿は見えない。

お豊に至つては、馬も馬子ももろともに、どこへ行つたか見えないのである。

竜之助は馬から飛び下りて、源太郎を抱き上げた。

弾丸たまは股ももを貫つらぬいたらしく、大した傷ではないけれども、驚きのあまりに氣絶きぜつしている。

「源太郎どの、源太郎どの」

呼び生かすと、

「むむ」

「氣を確かに、傷は浅い」

「ああ……吉田様、早く、お豊を早く……」

源太郎は氣がつくと直ぐに、手を上げて藪やぶの彼方あなたを指すので

あつた。思もうい設もうけぬ不覺である。道中かかるとのことの方一くにもとにもと、

丹後守が心添そえして附つけられたものを、まだその国許くにもとを離れな

い先にこの有様では、なんと申しわけが立つ。人に申しわけで

はない、大切の守り人を眼前みまへに奪さらわれて、武術ぶじゆつの冥利みょうりがどこに

ある。

そればかりではない、お豊は奪われてならない人である——
物に冷やかな竜之助も齒を嚙んで憤った。

「源太郎どの、賊は幾人ほどじゃ、何か見覚えはないか」

「たしか二人——わたしを撃つておいて、お豊を引捉えて、馬に載せて、あちらへ、あちらへ」

源太郎の介抱を馬子に任せておいて、竜之助は立つて前後を見る。乗つて来た馬は駄馬である、所詮敵を追うべき物の用には立たぬ。

少し北へ寄つた原中に、一つの小高い塚、その上には大きな松が聳えている。

すすきの茂る小野の榛原。竜之助はともかくもその塚までかけつけて、眼の届く限りを見渡す。ただ茫茫たる原野につづく密々たる深林と、遠くは峨々たる山ばかり、人の気配は更にな

い。

「ああ……」

ためいき溜息をつくと共に冷然たる己おのれに返った。いくら尋ねても無駄！ 案内知った者ならば、この野原をいずれの方角へでも逃げられる、逃げて窮すれば、山の中に入る、山でいけなければ、谷へ隠れる——不知案内の自分が、いくら追うたとて所詮しよせん無益である。

竜之助には、咄嗟とつさの間まにも利と不利とを判断する冷静があつた。

十四

奈良の春日神社の前。

宇津木兵馬は茶屋へ腰をかけ笠の紐をとく。

「ええ、毎年五月には子を産みまする、これはついこのあいだ生れたばかりでございます。エエ、もう人間と同じこと、この鹿は一頭で一つしか子は産みませぬ、生れると、煙草一ぷくの間に、もうひよこひよここと歩き出しますでございます。紅葉ふみわけ啼^なく鹿と申しましても、秋は子を生む時ではございませんで、妻恋う鹿と申しまして、つまり夫婦和合の時でございますな」

茶店の主人は鹿の話からはじめて、

「左様でございますか。春日様は藤原家の氏神^{うじがみ}でございますが、もとは鹿島^{かしま}の神様のおうつしでございますから、やはり、お武家様方の守り神でございます、春日四所大神と申しまして、その第一殿が常州鹿島の明神、第二殿が下総^{しもうさかとり}香取の明神と申す

ことでござりまする」

案内をかねて、よく故事を教えてください。

兵馬は、ここでちよつと聞いてみたくなつたことは、この奈良の土地から起つた宝蔵院流の槍の道場の跡が、まだこの地に残っているとのことであるが、それが今どうなっているかということでした。

「ええええ、かまほうぞういん鎌宝蔵院の槍の道場も、この興福寺の寺中に跡だけは残っているのござりまする。春日様へ御参詣をなすつて、二月堂の方から大仏へおいでになり、それからいらつしやいますとそこに道場だけは残っているのでございますが、槍をお使いなさるお方なんぞは一人もおいではございませぬ」

言われた通りに来て見ると、なるほど鎌宝蔵院の槍の名残の道場、むねゆき棟行は十二三間もあろうか、そうぬぐい総拭の板羽目いたばめで、正面には

高く摩利支天まりしてんを勧請かんじょうし、見物のところは上段下段に分れて道場の中はひろびろとしている。ここでも案内の僧は、よく説明して聞かせました。

「御承知でもござろうが、この宝蔵院流槍の開祖は、当院の覚禅房かくぜんぼう法印胤栄ほういんいんえいと申して、もとは中御門ななかみかど氏でござったが、僧徒に似合わず武芸を好んで、最初は劍術を上泉伊勢守こういずみいせのかみに学ばれたものじゃ。後に大膳太夫盛忠だいぜんたゆうもりただというものについて槍術を覚え、それより自ら一流を開いたものでござるが、もとより武芸は出家の心でない、覚禅房は刀槍とうそうを好んで、かくは一流を開きましたなれど、内心はこれを欣よろこばれぬじゃ。わが後の者必ず武芸を学ぶべからずとあつて、武器兵器はことごとく人に授けて、この寺へは一本も留め置かぬ。されば道場の名は残るといえども、覚禅房限りで、表面この流儀の跡が絶えたわけでもござる」

「かく覚禅房は出家として、武芸を後に残すことを好まれなかつたが、門下には錚々たる豪傑ごうけつがおつたじや。まず、権律師ごんりつしぜんえい禅栄といふのが、やはり当寺の僧徒で希代きだいの達人、これが宝蔵院のあとをつぎ申して、相変らず槍をやつておられたようにござる。一方、俗人の方においては中村市右衛門尚政という者が、これが宝蔵院覚禅房直伝じきでんじや。いま天下に行われる当流の槍は、この中村の流れを汲むが多いということである」

案内の僧は慣れていると見えて、息をもつがず滔々とうとうと述べ立てましたから兵馬は、

「このあたりにて、宝蔵院流の槍をよくする御仁ごじんは誰々でござろうな」

と尋ねてみると、

「さればさ……」

案内の坊さんは少しく首をひねり、

「当今、伊賀の名張なばりに下石おろしというのがある、これに宝蔵院流正統が伝わっているという話じゃ、愚僧わしは詳しいことは知らぬ、それにまた、術の妙を得た人には、この近いところ——」

坊さんは頷あじで、南の方をしゃくつて、

「三輪大明神の社家しやけに、植田丹後守というのがござる、これが当流の槍をなかなかよく使うそうじゃが、これもいつうわさこう噂ばかりで、誰もその実際を見たものはないと申すことじゃ」

「何と申されました、三輪大明神の社家で、植田丹後守殿？」

「左様、植田丹後守。なかなか学問もある。武芸修行ならば、ひとたびは訪ねてみて御覧ごらんじろ」

宇津木兵馬が植田丹後守をたずねた時、植田の邸は何か非常に取込んでいるようでしたが、それでも丹後守は兵馬の訪問を拒まずに座に通して、武術の話をしました。

「お若いに近ごろ殊勝でござる。して、剣道の御流儀は何をお究めなされましたな」

「幼少の頃、甲源一刀流を少しばかり。数年以前より直心陰の流れを汲みまして、未熟者相当の修行中であらうござりまする」

「ナニ、甲源一刀流？」

「兄なる人につきまして、その手ほどきを受け、それより江戸に罷り出でて直心陰の門末に列りました」

「直心陰は至極の流儀じゃ。して、御身の師とお頼みなされしは何と申される御仁か」

「下谷の御徒町おかちまちにて、島田虎之助と申しまする」

「ほう、島田虎之助——」

丹後守は何か思う仔細しさいのありげに、

「その島田虎之助殿は、もと豊前中津ぶぜんの藩中はんちゆうでござろうがな」

「いかにも、仰せの通り」

「号を見山けんざんと申される」

「左様にござりまする」

「そのお人ならば、拙者も近づきがある」

「それは意外に存じまする、いずれにてお近づきでござりましたか」

「ずっと以前、もはや二十年も昔のこと、拙者のこの道場に暫く足を留めておられたことがある」

「それは、不思議の因縁にござりまする」

「拙者が、今までに拝見致した劍術では、江戸で男谷下おとしや総守、筑後柳川やながわの大石進、それからただいま申す島田虎之助殿、この三人が至極とお見受け申した。もつとも近ごろは、江戸に有名な達人が多くおられるそう。拙者もかれこれ十何年あちらへ参りませぬ故、これは十何年も前の話で、今は何とも申されぬが、まず島田殿ほどの名人は、十年や二十年に幾人いくたりと現われるものでなからう、よき師匠をとり得てお仕合せに存じまする」

師匠のよい評判を聞くことは、兵馬にとつて自分のことを聞くように嬉しい。どこへ行つても島田虎之助の劍術を賞ほめる言葉ほを聞くけれども、今日この人の口から聞くと、よけいありがたく思われる。ちようど、最初に机弾正から島田虎之助の名を紹介された時と同じような確信をもつて話しているように思われる。人の技倆を、それだけに見るほど、この人の修養もそれ

だけに深いものと思えば、奥床おくゆかしい思いがする。よい人に会つたと兵馬は謹んでその言うところを聞いていると、

「島田殿は珍らしい人じゃ、こちらから話しかければ、いくらでも聞く、聞いたばかりで自分は何も語らぬ」

丹後守は自分で自分のことを言っているようです。丹後守としてこんなに話がはずんでゆくのは、これまた珍らしいくらいでした。

「あの時分、島田は鉄砲玉じゃという渾名あだながあつたそうな、それは、行つたきりで戻つて来ない、つまり、こちらから話をしかけるとそれを受け入れるばかりで、手答えがないのじゃ」

「ただいまも、その通りでござります。それ故に島田は奥行が知れぬと申す者もござります、劍術ばかりで、頭は空からじやと申す者もござりまする」

「そうでござろう。拙者の邸に足をとどめておられる頃も、夜更よふけまでじつと考えていて、修行者が来ても立合いということとはほとんどせぬ、強しいて立合いを望むと、こうして相手の面かおを、しばらくじつと見ておるじゃ、そうしてニコリと笑つて、立合いはせんでも勝負はわかっているところ申して、それきり。これには相手も弱つた」

「しかし、めざましい立合いも一度や二度は、あつたこととでござりましょう」

「いや、およそ一カ月の間に、一度も左様なことはない、ただ一度、拙者と槍を合せたことがござる」

「あ、槍の御高名を承うけたまわりました。それ故、一手の御教授を下くだし置おかれたく推参致すいさんしました次第でござりました」

「槍の高名——滅相めつそうなことじゃ」

丹後守は忽たちまちに打消してしまいましたが、兵馬はその機会をはずさずに、

「宝蔵院流の槍は、三輪大明神の社家植田丹後守殿に伝わると承まわりました」

「以てのほか。当今、宝蔵院の槍は伊賀の名張おろしに下石と申すのがござる、これがよく流儀すじの統すじをわきまえておられるはず、あちらへお越しの時に立ち寄ごろうつて御覧ごらんじろ」

丹後守は、再び槍の話はさせないよう、しないように言葉ぶげんを避けるから兵馬も、このうえ押すことはできなくなつて慥然ぶげんとしてゐると、

「さいぜんおっしゃった甲源一刀流のこと、ついこの間も、その流儀から出でたものらしい、これも珍めづらしいお人が見えた」

「甲源一刀流の？」

兵馬は、そう聞いて少し気色けしきばむ。関西においては甲源一刀流を学んだものがないことはないけれども、その流名を聞くことは甚だ稀れである。その流名を兵馬が聞けば、屹きつと思ひ当ることがある。

「そのお人と申すのは、如何いかよう様の人にござりしや、少々思ひ当ることもあれば」

「その構えが無類じゃ、じつと竹内しなを青眼にとつて、ただそのままの形……」

「さては——」

兵馬は我知らず膝を進めて、

「年の頃は？」

「三十三四でもあろうか」

「顔色青白く、眼は長く切れて、白い光を帯びた人ではありませぬか」

「その通り」

丹後守の無造作むぞうさに頷うなずく時、兵馬の眼は燃ゆる。

十六

「ああ、惜しいことをした、貴殿のおいでが二日早ければ……」
丹後守は、兵馬から机童之助の身の上と、兄が遺恨いこんのあらましを聞いて、兵馬の来ることの遅いのをくやんだが、

「どうも、あの宇陀うたの山を南に吉野山中に迷い込みはせぬかと思われる。ただいま人をかけて行方ゆくえを搜索中であるが、もしあの山中へ迷い込んだことなら、容易に見つからぬ」

兵馬は、ひとたびは力を得、ひとたびは失望し、さてこの上は自分も吉野郡の山中へ踏み込んでどこまでも行方を探すばかりだと覚悟を決めました。

こう覚悟をきめてみると、ここに悠々としている必要はない、例の宝蔵院の槍のことも、この場合、強^たつての所望^{しよぼう}でもないのですから。

「よき手がかりを得て、かたじけのう存じます。早速に拙者^{かたぎ}は仇のあとを追うて、吉野の方へ参ることに致しまする」

「それもよろしゅうござる、お留めは致さぬが、しかし兵馬どの、拙者の見受け申すところでは、その机竜之助とやらは稀代^{きだい}の遣い手^{つか}である、ほとんど今の世に幾人となない遣い手である様子^てじゃ」

「そのことは心得ておりまする、憎むべき敵^{かたぎ}なれども、剣を取つ

ては甲源一刀流において並ぶものがござりませぬ」

「もとより貴殿とても、島田虎之助殿取立てのことなれば、抜かりもござるまいが、何を申すもまだお年若」

「左様にござりまする」

「ことに、あの太刀先が難劍じゃ。じつと青眼に構えて、ちつとも動かず、相手の出る頭かしらを待つて打つという流儀と見受け申した」

「いかにも左様でござります、あれは関東の劍客が、名づけて『音無しの構え』と申し、かの竜之助が一流の遣い方でござりまする」

「そうでありましょう。さて、兵馬殿、失礼ながら、御身にはその音無しの構えとやらをどのようにあしらわれる、その工夫くふうは……」

「工夫としては更にござりませぬ、ただこの太刀先に柄も拳も我が身も魂も打込めて、彼が骨髓を突き貫く覚悟でござります」
丹後守はその一言を限りなく喜んで、

「それではなくてはいかぬ、それならば必ず討てましょう。よし相討ちになるまでも、我の受ける傷より、敵に負わす傷が深い……時に兵馬殿、わしが家の道場を見てもらいたい」

「ありがたき仕合せ」

丹後守は兵馬をつれて邸内の道場へ来ると、今まで話が槍術に亘ることをすら避けていたのに、ここで我から進んで身仕度をして襷をかけ、稽古槍を取り下ろしました。さては見処があつて、兵馬のために宝蔵院流の槍の秘術を示すためか知らん。

話がまた少し戻つて来ます。

はいばら 榛原の山道で薬屋源太郎が打たれた時、机竜之助はその鉄砲の音を聞いて駈けつけたが、七兵衛は早く兵馬に知らせたいことに急がれて、鉄砲の音には心を残して西峠まで走せて来た時、そこで行逢つたのが駿馬しゅんめに乗つた二人の武士。

この二人の武士もまた時ならぬ鉄砲の音に驚いて、

「さては」

と丹後守の言つたことを思い合せたところへ、ぶつかつたのが七兵衛でした。どうもこういう場合に七兵衛の足どりが穏かでない。

「待て」

すれ違ひの時に、内山という若い方の武士が鋭く七兵衛を呼

び留めました。

「へえ……私共でございますか」

「お前は、いま向うから来たようだが、あの鉄砲の音は何事だ」
「いつこう存じませぬ、大方、獵師さんが雉子きじでも打ったんで
ございましょう」

もとより七兵衛は何も知らない。もし間違いであつて、かかわ拘り
合ひになつては面倒だから、いいかげんにあしらつてサツサと
歩き出すと、内山はよほど七兵衛を怪しい者と認めたらしく、
「待て待て」

「いや、急ぎますから、私共は急用の者でございますから」
「待てというに待たぬか」

七兵衛は足が早い、それを弱味があつて逃げ出すものと認め
たらしく、内山は丹後守から預かつて来た「引落し式」の拳銃を

七兵衛のうしろから差向けて、威おどすつもりで切つて放した弾丸たまが、七兵衛の右の頬のわきおよそ一尺ぐらいのところを風を切つて通ります。

「何をなさいます」

これには七兵衛も驚いた、いくら七兵衛が足が早いとても、鉄砲の玉にはかなわない。足をとどめて振返る途端とたんに左手の林の中へ飛び込みました。

馬上の両人は弾丸に驚いた七兵衛が、立竦たちすくんでしまうだろうと予期していたところを、彼は驚くべき敏捷びんしょうさで林の中へ身を投げ込んでしまったから、

「おのれ、曲者くせもの！」

二発、三発、例の拳銃を林の中へ打ち込んで、馬から飛び下りて探してみたが、もう七兵衛の姿は見えない。

十八

ここは針ヶ別所はりべつしよというところの山の奥の奥。谷合たにあいの洞穴ほらあなへ杉の皮を茸ふき出して、鹿の飲むほどな谷の流れを前にした山中の小舎こや。

無論、ここまで来てみれば、小舎も流れも、どこからも見えはしない、ここまで来るのでさえ道というものはついていない。今、その中で人の話し声がする。いかに大きな声をしたからとて山の上まで響くはずがない。よし山の上へ響いたとて、そこには誰も聞く人はない。

「金蔵、うまくいったな」

ゾツとするほど気味の悪い鍛冶倉かじくらは、小舎の中へ敷き込んだ

熊の皮の上にあぐらをかいて、煙草を吹かしてこういう。

「親方、うまくいきました」

金蔵はまだ落着かない様子。

「まあ、暫くはここで窮命きゆうめいしろ」

鍛冶倉は、この辺の山の中へとところどころこんな小舎をこしらえておく。そこへはいつでも十日分ほどの食料を用意しておく。

「親方、こうなつてみると、俺は一刻も早くお豊をつれて里へ出たい」

「ばかなことを言うな、いま連れ出せば罫わなの中へ首を突つ込むようなものだ、七日辛抱しんぼうしろ、そうすれば、やすやすと抜けられる」

「七日は永いなあ」

「ナニ、永いことがあるものか、手鍋さげても奥山ずまいとい
う本文通りよ、結句けっく、山ん中が面白可笑おもしろおかしくていいじゃねえか」

鍛冶倉の笑いぶりは人間並みの笑いぶりではない、生塚しょうづかの婆
様を男にして撥くすくつてみたような笑い方をする。金蔵はその笑い
方を見て、いまさらゾツとして、

「親方、お豊は俺の女房だな」

「ふーん」

鍛冶倉は鼻のさきで笑った。金蔵は眼の色を少し変えた。

「親方、俺はお豊をつれて国越えをしてみたい、これからすぐ
に」

金蔵は、今、鍛冶倉の笑い方を見てはじめて、お豊をここへ
置くことが怖ろしくなったらしい。

「何だい、何を言うのだい金蔵」

どうも冥府よみから響いて人を取って食いそうな声だ。

「親方、お前さんはここに隠れておいでなさい、わしはこれからお豊をつれて逃げます。ナニ、命がけで逃げますよ」

「やい、金蔵、物を言うには、よく考えて言えよ」

「何だ、親方」

「この野郎、いま俺のすることをよく見ている」

何をするかと思えば鍛冶倉は、

「これやい、お豊、お豊坊」

鍛冶倉うしろの背後には、さつきから女が一人、泣き伏している、その帯際おびぎわを取った鍛冶倉。

馬上の武士に鉄砲おどかで脅された七兵衛は、林へ飛び込んで木の繁みを潜くぐって北へ逃げた。

やまべしおり
山辺郡につづくあたりは全く人家がない、初瀬の裏山へかかっても人家がない。

人家のないことは何でもない、山道を通ることも七兵衛には何の苦もない、山でも林でも、ずんずん横切つて北へ通してみたら奈良街道へ出るだろう、それを南へ直下すれば八木へ着く。榎ならの小枝を折つて蜘蛛くもの巣を打ち払いながら北を指して行つたが、行けども行けども山。

そうして七兵衛は針ヶ別所に近い或る山の上に立つて、木の下蔭から日脚ひあしの具合を見て、しばらく方角を考えていました。別に疲れも怖れもしないが、いくら山の中の木の葉の繁みを歩いたからとて、夏のことだから汗も出れば咽喉のども乾く。

「水が飲みたいな」

滝の音が聞えない、溪流の響きが耳に入るでもないけれども、

山と山との谷間たにあいには多少の水はあるものである。木の葉の雪しずくが沢に落ちて、折々通う猪鹿の息つきになる水を、谷底へ行けばどこかに見つけることができるものである。

七兵衛は、路のないこの山を一つ下りてみようとして、

「はて、誰かこの道を通ったものがあるらしいぞ」

下萌したもえの中を見てこう言いながら下りて行きました。

七兵衛が下りて行つた時分、この谷底では、ちょうどこの時、前のような有様でありました。

鍛冶倉がお豊の帯際に手をかけた時だけは、金蔵は怖おそろしきも恐こわさも忘れてしまつて、

「親方、どうしようというのだ」

前後の思慮もなく鍛冶倉に武者振むしやぶりつきました。

鍛冶倉はお豊を放ほつておいて、そこに投げ出してあつた細引ほそびきを拾い取ると片手に持つて、金蔵を膝の下に組み敷く。

「親方、な、なにをするんだい」

金蔵とてもこのごろはかなりの悪党になっている。上から押えられながら、下から匆はね返そうとする。

「この野郎」

鍛冶倉は縄を口でしごいて、処嫌ところきらわず金蔵を縛ろうとする。縛られまいとして、一生懸命の力は金蔵といえども侮あなどるべからず。

「な、何だい親方、そ、そう無茶に人を縛るなんて」

「野郎、手向いをしやがるな」

鍛冶倉は上から押しつぶそうとのしかかる、金蔵は跳ね起きようともがく途端に、手に触れたのは鍛冶倉の腰にさしていた

山刀^{やまがたな}。それを奪い取ろうとして遮^{しやにむに}二無二引き廻すと、鞘^{さや}が脱け落ちて身だけが金蔵の手に残る。

「アッ！」

どこを突いたか、突かれたか、鍛冶倉は縄を持ったなり二三尺^と飛び退^のいて、横腹のあたりを押えながら面^{かお}をしかめる。血がダラダラ二三滴、熊の皮の敷物の上へ落ちる。

「野郎、突いたな！」

「突いたがどうした」

けれども、鍛冶倉の引っぱった縄は金蔵の首に捲きついてい
る。

「アッ、苦しい！」

縄をグツと引くとグツとくびれる。

「アッ苦しい！ お豊……お豊さあーん」

血の染しみた山刀を振り廻して金蔵は眼を白黒しろくろ、苦しまぎれにお豊の名を呼びながら無茶苦茶に飛びかかつて山刀で鍛冶倉の面を斬る。鍛冶倉は左の脇腹わきばらを刺されている。金蔵の首へかけた縄は放さなかつたけれど金蔵の刀は避けられず、またしても左の額際ひたいぎわを一刀ひとたちやられた。血が迸ほとばしって眼へ入る。

「野郎、また斬つたな」

「アツ、苦しい、お豊……お豊さあーん」

向うが苦しければ苦しがるほど、こつちが苦しい。

「ア痛ッ」

鍛冶倉は眼へ血が入つたので、夢中になつて、金蔵の首へかけた縄は放さずに小舎こやの外へ転がり出す。金蔵はそれに引っぱられて、

「ああ苦しい！」

もう息の根が止まりそうである。断末魔だんまつまの勇氣でまた斬りつけたのが鍛冶倉の肩先。

「あッ、また斬りやがった」

鍛冶倉は外へのり出して、谷水の傍の岩角へ打倒れたが、起き直つてめくら探しに金蔵の傍へよる。

「野郎、飛んでもねえ、呑んでかかったのがこつちおちどの落度だ……覚えてろ、よくも俺を斬りやがったな」

細引をもう一巻き、金蔵の首に捲いた時は、乳のあたりをまた深く一つ。

「あッ痛つ！」

今度のはいちばん痛そうであつたが、

「アッ苦しい！」

金蔵の方も、これがいちばん苦しうであつた。この一言で

双方の力がグツタリ尽きた。

お豊はこの騒ぎで、もう前から気絶している、つづいて二人はこんなことをして息が絶えてしまった。それで小屋の中が森閑ひっそりしたところへ七兵衛が水を呑みに下りて来たのでした。だから七兵衛は、ちょうどこれらの連中を始末するためにここへ下りて来たようなことになりました。

十九

伊賀の上野の鍵屋かぎやの辻つじというのは、かの荒木又右衛門が手並てなみを現かたきわした敵打ちの名所。

その鍵屋の辻に近い吉田屋という旅籠屋はたごやの一室に、机竜之助

は、まだ袴はかまも取らないで柱によりかかっている。

襖ふすま一重の次の間で、

「拙者は、田中新兵衛の仕業しわざに相違ないと思う」

「いや、拙者はそう思わぬ、田中はそんな男でない」

田中新兵衛という名。京都へ上るときに大津を出て、逢坂山おうさかやまの下の原で、後ろから不意に呼びかけて自分に果し合いを申込んだ薩州の浪人がそれだ。

「田中でなくば、あれだけのことはやれぬ、第一、証拠がある」

「いやいや、田中なら、あんなことはやらぬ。刀を捨てて逃げような慌あわてた真似まねをするものでない」

「というて、その刀は田中のほかに持つべき品でない」

「さあ、それが拙者にも解げせぬ、田中はなんとも言わず腹を切つたことだから、どうも解らぬわい」

「申し開きをせず腹を切ったことだから、言わずと当人罪つみに落ちたものじゃ」

「そうとも言い切れぬ、何かその間に……拙者もよく知っているが、あの田中という男は人を斬ったこと幾人か知れぬ、人を斬ることは朝飯前と心得ている、近頃は仕事がなくて腕うでが鳴る、誰か斬る奴はないかと人斬りを請負うけおって歩くほどの男じゃ」

「それにしても先方に位がある、威おごに怖おそけたかも知れぬ」

「そんなことはない、侍従や少将の位こゝろが怖おそくて暗殺はできん」
「役人も、薩州方も、新兵衛の仕業しわざと思うているそうじゃ」

「拙者は、やはりそう思わぬ、新兵衛ではない」

これだけ聞いたのでは何だかさッパリわからない。人を斬つたのは田中新兵衛である、いやそうでない、斬って刀を捨てて来た、当人は黙って切腹した、斬られたのは位のある人——こ

れだけの話の筋を辿れば、かの主水正正清の長刀を帯していた新兵衛が、あの刀で誰をか斬つたものだろう。とにかく、あの男は何かやりそうな男であつたが、はたして何かやつた。しかし切腹とはかわいそうである。竜之助は、もつと詳らかにそのことを聞いてみたいがと思つていると、階下から数多くの人の足音。

「やあ、遅なわり申した」

「これは、諸君」

刀の鞘、袴の裾の音がものものしい。聞いてみると、それは雑多の声で、九州弁もあれば土佐弁もある。この地の藩の人ではない——近ごろ流行る浪人者である、と竜之助は直ぐに感づきました。

今の次の間の話——田中新兵衛が何者を斬ったかというのはい
こうである。

これより先、五月の二十一日に、京都朔平門外、猿ヶ辻とい
うところで、あねこうじしやうしやうきんとも姉小路少将公知という若い公卿さんが斬られた。

少将がその日の夕方、吉村右京、金輪勇という二人の家来を
つれ、ちやうちんもち提灯持を先に立てて、御所を出でて猿ヶ辻のところまで
来た。

御所へ水を入れるところの堰の蔭から、物をも言わず跳り出
でた三人の男がある。おおわざもの大業物を手にして、かお面もからだ身体も真黒で包
んでいた。

「すわ！」

吉村右京は血気盛んの壮者であつたから、わかもの素手すででこの曲者くせものに
立ち向つたが、かんじん肝腎の主人の刀を持った金輪勇は、きも肝を潰つぶして

やみくもに逃げてしまふ。

兇漢のうちの一人、すぐれて長い刀を持ったのが、吉村をほかの二人に任せて、姉小路少将をめぐけて一文字に斬りかかる。抜き合わすべき刀は金輪が持つて逃げてしまった。

「小癩こしやくな！」

姉小路少将は、持つていた中啓ちゆうけいで受け止めたけれども、それは何の効ききめもない、横鬢よこびんを一太刀なぐられて血は満面ほとほしに迸る。二の太刀は胸を横に、充分にやられた。それでも豪気の少将は屈しなかつた。

「慮外りよがいもの者めが！」

兇漢の手元を押えて、その刀を奪い取つてしまった。その勢いの烈しさにさすがの刺客しかくが、刀を取り返そうともせず、鞘までも落したまま一目散いちもくさんに逃げてしまった。

吉村に向つた二人も、つづいて逃げ去つてしまった。

姉小路少将は重傷おもてに屈せず、奪つた刀を杖について、吉村に介抱されながら邸へ戻つて来たが、玄関に上りかけて、

「無念！」

と一声言つたきりで倒れて息が絶えた。生年僅か二十八歳（或いは三十歳）であつたという。

この姉小路という人は、體質は弱い人であつたけれども、十九ぐらいの時に夜中やちゆう忍び歩いて、関白以下の無氣力の公卿を殺そうという計画を立てたほどの気象きしやうの荒つぽい人であつた。東久世ひがしくぜ伯は、こんなことを言う、「そうさ、我々の仲間では、あれがいちばん豪えらかつた、岩倉とどちらであろうか、ともかくも岩倉と匹敵ひつてきする男であつた、岩倉よりも胆力があつて圧おしが強い方であつた、しかし氣質と議論が違ふからとうてい両立はできない、

岩倉をやつつけるか、やつつけられるか、どちらかであろう」と言われましたが、まことに惜しいことをしたものです。

またその頃の蔭口かげぐちに、「三条公は白豆、姉小路卿は黒豆」という言葉もあった。

これほどの人が何故に殺されたか、その詮議せんぎよりもまず何者が殺したかという詮議であつたが、そこに残された刀が物を言う。

その刀は縁頭ふちがしらが鉄の鎖くさりで、そこに「田中新兵衛」と持主の名前が明瞭きざに刻んであつた。中身は主水正正清もんどどのしょうまぎよ、拵こしらえはすべて薩州風、落ちていた鞘までが薩摩出来に違ひないのであつた。

「田中新兵衛——」

薩摩の田中新兵衛とは何者とたずぬるまでもなく、その時分、評判者の斬り手である、人を斬りたくつて斬りたくつてたまら

ない男である。島田左近を斬つたのもこの男だと言われているのである。そうして、当時有名な志士の間にも交際がある、現に四五日前も、姉小路少将の家へ来て何か意見を述べて行つたことがあるという。

「田中を捉つかまえろ」

田中は平気で薩州の邸内に寝ていた。呼び出してみると、

「左様なことは存ぜぬ」

頑として、首を横に振る。

「存ぜぬとは卑怯ひきようであろう」

役人は詰なる。

「卑怯とは何だ、知らぬ者は知らぬ、存ぜぬことは存ぜぬ」

新兵衛は役人をハネ返した。

「証拠が物を言うぞ、隠し立てをするな」

役人は突つ込む。新兵衛は沸然^むとして、

「田中新兵衛は人を斬つて、刀を捨てて逃げるような男ではござらん」

あくまで手剛^{てしわ}いので、役人は下役を呼んで持つて来さしたのが、例の捨てて逃げた刀である。

「新兵衛、この刀に覚えがあるか」

役人は、それ見たかと言わぬばかり。

「拝見」

新兵衛は、その刀をとつて見た。自分の刀である。

「さあ、どうじゃ、その刀は誰の刀であるか」

新兵衛はじつと見ていたが、

「これは拙者の差料^{さしりょう}に相違ない」

「そうであろう」

役人は勝利である。

ここに至つて、潔き新兵衛の白状ぶりを期待していると、新兵衛はその刀を取り直す早いか我が脇腹へ突き立てた。

「や！」

並み居る役人も番卒も、一同に仰天した。支えに行く間に、もう新兵衛はキリキリと引き廻して咽喉笛をかき切り見事な切腹を遂げてしまった。

あまりのことに一同のあいた口がふさがらなかつた。

新兵衛は刀はたしかに自分の物と承認したけれど、姉小路を殺したのは俺だと白状はしなかつた。これがために、疑問はいつまでも残された。

竜之助の次の間でも問題になつたが、一説には、その前日、新兵衛は三本木あたりの料理屋で飲んでゐるうちに、何物にか刀

を摺すりかえられたという。武士が差料さしりょうを摺りかえられたことは話にならぬ、さすがの田中がその当座、悄しよげ気返かえつていたという。とにかく、姉小路を殺したものは何者であるかは今日でもわからない、おそらく新兵衛ではあるまいということ。

竜之助のいる次の間へ多くの人が入って来たので、田中新兵衛の噂は立消えになったが、

「女中、あの襖ふすまをはずしてくれ」

彼等の集まったのは、竜之助の隣りの十畳の間を二つ打抜いたので、竜之助のはそれにつづいた六畳一間であったが、いま向うでその襖をはずせと言ったのは、集まった浪人の中の重立おもだつた者らしい。

「あの、お隣りにはお客様がおいででござりまする」

「ナニ、隣りに客がいる？ その客というのは何者だ」

「はい、やはりお武家様でございます」

「ふむ、武士か。幾人いる」

「お一人でございます」

「一人——しからばなんとか都合つじうをして、そのお客をほかの座敷へやつてくれ」

「はい……」

「我々共が、この三間を通して借受ける、隣りのお客に体ていよく申して立退かしてくれ」

「お話を致してみましよう」

女中は心なくお受けをして引き下った様子。浪人連は、

「暑かったな」

「なかなか暑い」

「風呂に入れ」

「今、酒井と那須が入っている」

「そうか、氷を食え」

氷を囙かじる音ガリガリ。

「いま聞けば、このつい先が鍵屋の辻と行って、荒木又右衛門が武勇を現わしたところじゃそうな」

「うむうむ、それをいま知ったか」

「面白い、荒木の三十六番斬りなんといふのは、よく張扇はりおうぎで聞くが、いつも壮快じゃ、荒木の前に荒木なく、荒木の後に荒木なしと言つてな」

「山陽の作つた詩に、こんなのがあつた、ひとつ歌つて聞かそうか」

「謹聴」

詩を吟ずることを得意にする者が、興に乗じて歌おうという、
一同はそれを謹聴するものらしい。

伊賀城頭西閭門、

復讐跡あり恍として血痕、

仇人、馬に騎り魚貫して過ぐ、

挺刀一呼、渠が魂を奪ふ、

姉夫慷慨にして兼ねて義に従ふ、

脊令原寒うして同じく冤を雪ぐ、

一水西に渡ればこれ嶠原、

当時投宿の館はなほ存す、

吾れ来つて燈を挑げて往昔を思ふ、

想ひ見る淬刃暁暎を候ふ、

嗟哉、土風なほ薄夫をして敦ならしむ、

寛永の俗、いま誰と論ぜん。

詩は吟じ終つて暫らくのあいだ静かである。それにしても、もう立退き命令が来そうなものじゃと、隣室となりの竜之助は心待ちにもなるが、なかなか来ない。

ちよつと、隔ての襖を細目にあけた者があつたようだが、あけて直ぐに立て切り、

「まだいるわ、隣りに男が一人いる」

あけた男は、やや小声であつたけれど竜之助にはよく聞える。

「まだいるか、女中め、なんとも言わん」

ハタハタと手が鳴る。

「お召しになりましたか」

忙せわしげにやって来た女。

「これこれ女、ナゼさいぜん申しつけた通り、隣室へ申し入れ

ん」

「はい、どうも相済みませぬ、つい忙しいものでござい
ましたから」

「早速、申し入れろ」

「はい、ただいま……」

女中は、すぐに来るかと思うと、すぐには来ないでいつた
下の座敷へ行ってしまったらしい。竜之助は袴でも取ろうかと
思っているところへ、

「御免あそばせ」

例の女中が入って来て、

「旦那様、風呂をお召しになりましたは」

「まだ入りたくない」

「あの、旦那様、お隣室となりが混み合いました、まことにやかまお喧しゆ

うございましょう。あの、少し手狭てせまではございますが、あちらの四畳半が明いておりますから、御案内申しましょうか」

「ここでよろしい」

この室でよろしいとキツパリ言われたから女中は二の句が継げなかつたが、やつと、

「それでも、ここは、あのお隣室のお客様が夜更けまでお話しになるとお困りでしょうから」

「いいや、賑にぎやかでかえつてよい」

膠にべもない言葉である。

「それでは、どうも……」

切出しが拙ますかつたので、女中はへトへトになって言葉を濁にごして出てしまいました。

しばらくたつと、また隔ての襖が一寸ほど開いて、じつとこつ

ちを見たのは眼の大きい面の色の赭黒いあかぐろ総髪そうはつの男であつたが、
今度は篤とくと竜之助の面を見定めてから、また襖を締め切り、

「まだいるぞ」

「まだいる？」

また手がハタハタと烈しく鳴る。

「お召しになりましたのは、こちら様で……」

恐る恐るやって来たのは、以前の女中でなくて番頭。

「貴様は何だ」

「へえ、番頭でございます」

「さいぜんから、この隣室を明けておもらい申すように再三申しつけたところ、なんでそのように取計らわぬ」

「恐れ入りましたでございます、では手前からもう一応」

番頭は非常に恐縮して、すぐその足で竜之助のところへやつ

て来ました。

「御免を願いまする——」

「何用じゃ」

「どうも、混雑致しまして、行届き兼ねます。時にお客様——甚だ申し兼ねた儀でござりますが、このお部屋は、ちと喧やかましゅうござりまするので、どうか、あちらへお引移りを願いたいものでござりまして……」

「いや、ここでよろしい、かえつて賑かにぎかでよい」

「へえ……」

番頭は思わず頭に手を置いた。

「それに致しましても、隣室の衆が、お気の荒いお方のように見えますから、もし間違いでもありません……」

「いや、心配することはない」

「でも、もしやお間違いが出来ますると、あなた様のみならず手前共まで迷惑致しますから、どうぞお引移りを」

「こちらが黙つて控えておれば間違いの起る筋すじもなかるう、心配するな」

「でもござりませうが……」

「ここでよろしいと申すに」

番頭は困こまじ果てた。この時、隔ての襖を荒つぽく引きあけて、
「御免」

案内もなく入り込んで来たのは、髻もとどりを高く結び上げて、小倉こくらの袴はかまを穿いた逞たくましい浪士であります。手には印籠いんろう鞘せやの長い刀を携たずさえて、

「番頭どけ——」

竜之助の前へ慥どっか然と坐つて、

「初めて御意得申す」

「何か用事でござるか」

「さきほどから再三、宿の人を以て申し入れる通り、我々はごらん通りの多勢じゃ、お見受け申せば貴殿はお一人、どうかこの席を多勢の我々に譲っていただきたい」

「その儀ならばお断わり申す」

「ナニ、断わる？」

印籠鞘の武士は眼に角かどを立てて、

「女中や番頭どものかけ合いとは事変り、武士が頼みの一言じゃ、気をつけて挨拶を致せ」

竜之助は武士の方には取合わないで、番頭の方を見て、

「番頭殿、この気狂いを、あっちへ連れて行ってくれ」

印籠鞘は激昂げっこうして、

「氣狂いとは何だ……氣狂いとは聞捨てならん」

「まあまあ、そのところをひとつ——どうかそういうわけで
ございますから旦那様、多勢たぜいに無勢ぶぜいでどうもはや、どうかお引
移りを願いたいもので……」

番頭はてんでこまいをはじめめる。

「汝おのれは間諜いぬじゃ、幕府の犬であろうな」

印籠鞘の浪士は竜之助に詰め寄せる。

「やれやれ！ やつつける！」

いま開け放しておいた襖ふすまから七つ八つの、いずれも穩かなら
ぬ面かおがさいぜんから現われて、この無作法ぶさほうな浪士の後援をつと
めていたのがいま一斉いっせいに弥次やじり出した。

どこへ行つても、今頃は、こんな血ちの氣けの多いのに打突ぶつかる
ことが珍らしくない。いや、竜之助は、これよりもつともつと

いのちし
生命知らずの新撰組や、諸国の浪士の間に白刃しらばの林を潜くぐつて来た身だ。

白い眼で、じつと見て、左手で植田丹後守から餞別せんべつに貰った月山がつさんの一刀を引き寄せる。

竜之助は、この刀を持ってから、まだ人を斬ったことはないのである。さりとてあまり物好きな、この連中を相手に喧嘩けんかを買ってみる気か知らん。

浪士らは、一喝の下に嚇おどしてくれようと威勢を見せたが、案外、手答えがなく、シンネリとして蒼白あおしろい面に憤いきどおつて沸くべき血の色さえも見えず、売りかけられた喧嘩なら、いくらでも買ひ込む気象を見せて、刀を引き寄せた竜之助の挙動を見て、かっは呆あきれかつは怒ったのであります。

「おの、汝おのれは、生命いのちというものが惜しくないか！」

印籠鞘の浪士は居合腰いあいごしになつて刀を捻ひねつたのである。

「生命なんぞは惜しくない——」

彼は月山の新刀を手にとると、この時むらむらとして無暗むやみに人を斬りたくなつた。

「いけません、いけません、どうかまあ、あなた様もお鎮しづまり下さい、こなた様もお控え下さい、手前共で迷惑を致します、ほかのお客様にも御迷惑になります、どうか、お抜きなさることは、御容赦ごようしやを願います、御容赦を願います」

番頭は必死になつて支えてみたけれども、もとよりその力には及ばない。

「宿を騒がしても気の毒じゃ、どうだ諸君、これより程遠からぬところに鍵屋かぎやの辻つじというのがある、鍵屋の辻へ行こう、音に聞く荒木又右衛門が武勇を現わしたところじゃ、そこで一番、火

の出る斬合いをやって、伊賀越えの供養くようをしてみたいなあ」

かの印籠いんろうざや鞘の武士は衆を顧みて腕をまくり立てる。

「結構、事の血祭りに幕府の間諜いぬを斬れ、伊賀の上野とは幸先さいさきがよい、やい幕府の間諜、表へ出ろ、荒木が三十六番斬りの名所を見せてやる」

彼等は竜之助を、その鍵屋の辻へ引張り出して斬つてしまおうと考えたらしい。まことに無意味な行きがかりに過ぎないけれども、竜之助はそれを拒むこぼべき人ではなかった。

この時、向うの室の床柱を背負つて、さつきから少しも動ぽうぜんかずに茫然と事のなりゆきを見ていた小兵こひょうにして精悍せいこん、しかも左の眼のつぶれた男があつたが、

「おのおの方、詰つまらんことをなさるな」

小兵にして精悍な、左の眼のつぶれた右の浪士は、膝の上に

絵図をひろげて眺めていながら、さいぜんからの騒ぎは、よそを吹く風のようにしていたが、この時はじめて頭を振向けてこう言った。

「あまりといえば無礼な奴」

「無礼は、こちらのこと」

「先生、これは間諜いぬでござる、幕府の犬に違いござらぬ」

「なんにしても、おのおの方よりは少し強いようじゃ」

「宿を騒がすも気の毒ゆえ、鍵屋の辻へ引っぱり出して斬つてしまおうと存じます」

「あべこべに斬られてしまふぞ」

「何を！ たかの知れたる間諜」

「フム、こつちで模様を見てみると、先方の方がよほど強い」

「左様なことはござりません、先生にも似合わんことをおっしや

る」

「強い、強い、先方が強い。この分で、鍵屋の辻へ行こうものならまたた瞬まく間に、おのおの方がなでぎ撫斬りになる」

「これは先生のお言葉とも覚えん、さほどに我々を見みくび縊り給うか」

「とにかく引上げ給え、こちらの出様が悪い、かけ合いが礼儀でない」

小兵にして精悍な、左の眼のつぶれた浪士と、他の浪士どもとの問答はこんなふうであります。味方をたしなめて敵の者をほ賞めている。竜之助はその言葉つきの妙に落着いたのを聞いて、その何者であるかをいぶか訝っていたが、乱暴な浪士どもの氣勢は、これですつかり折れてしまった。

「さて、明日は大和へ入ってはぎわら萩原へ泊る、それからうだ宇陀の松山

へ出ようか、初瀬^{はつせ}へかかろうか」

左の眼のつぶれた浪士は、また地図を拡げて、

「萩原から松山まで二里一町——松山から上市までが四里と十三町——これを初瀬の方へ廻ると榛原^{はいばら}から一里十七町、三輪、桜井、八木へ出て南へ下る」

里数を、あれからこれと数え立てられて一座の浪士は烟^{けむ}に捲かれる。

「さあ、おのおの方、ここへ来て、地図をごらんなされ、那須氏には、ようこの道を御存じのはずじや、十津川^{とつがわい}入りには、いづれの道をとつたがよいか」

「左様、十津川入りには……」

いちばん先へ喧嘩に出たのが、畳の上に拡げた絵図面の方へ首を持って来て、

「初瀬から八木へかかるが道はようござるが、近頃は……」

「松山へ出た方が近うござるか」

「左様——」

どうやら、この絵図一枚で喧嘩が納まりそうである。

この左の眼のつぶれた人は、とつがわてんちゆうぐみ十津川天誅組のきよかい巨魁松本奎堂であつたことが後に知れる。

二十

お豊は、我を忘れててすり欄干の上から下の往來を見下ろした時に、薬屋の前を総勢十人ほどの旅の武士が隊を成して通り過ぐるのを認めました。

「ああ、あの方はたしかに……」

笠を深く被かぶつてはいたけれど、お豊はその旅の武士の一隊の中に、竜之助のあることをたしかに認めたのであります。

お豊は周章あわてて梯子段はしごだんを下り尽したけれども、かの十人ほどの武士の一隊のうちの一人も、店へ入つて来た人影はありませんでした。店先に打ち水の空手桶をさげてぼんやり立っているのは女中一人。

「お光さん、今こちらへ、お客様がお見えになりましたでしょう」

「いいえ」

「それでは、ここを十人ばかりのお武家様がお通りになつたでしょう」

「あ、お通りになりました」

「そして……どちらへお越しになりました」

「鳥居のわきを南の方へおいでになりました」

「まあ、そうでしたか。それでは違つたか知ら」

お豊はそれから、もしやと植田丹後守の邸の前まで行つてみました。

しかし、邸はいつもの通り穏かなもので、下男の久助が打ち水をしている。

「久助さん、久助さん」

「おや、お豊さんか」

「あの、ただいまお邸へお客様がありましたか」

「いや、さつき郡山こおりやまからのお使が一人見えたつきり、正午前おひるまえの

うちは武者修行が三人ほどおいでになりましたが、直ぐお帰りでした」

「ああ、そうでございましたか。あの、たつたいま十人ほどの

お武家が、こちらへお通りになりましたから、もしやお邸のお客様ではないかと思ひまして」

「いや、そんなお客様はおいでがない、十人はさて措き、一人もお見えになりませぬ」

「そうでございましたか」

お豊はここにも言わん方なき失望でありました。

川上へ雨が降つたので、初瀬川の水嵩は増して行きました。河原の中程にあつた地藏堂は引き上げられて、やや離れた竹藪と仮橋かりぼしの間に置かれてあつたが、その藪へも水はひたひたと寄せているのでありました。

お豊は仮橋から向うを見渡したけれど、桜井の町の燈火あかりが明るく見え、多武峰とうのみねが黒ずんでいるほかには人の影とては見えないのであります。

淡月うすづきは三輪山の上を高く昇つてゐるのに、河原はなんとなく
暗い——涼しい風は颯さっと吹いて来た。川波を逐おうて、螢ほたるが淋し
いもののようにゆらりゆらりと行く。

「ああ、わたしとしたことが、なんでこんなところまで来たの
でしょう」

幻影まぼろしを追うて夢の里を歩み、何かに引かれてここまで来たが、
気がついてみると、お豊は自分ながら、なんでこんなところへ
来たのかわかりませんでした。

ここへ来ると気が抜けて、お豊は行くのもいや、帰るのもい
やになりました。

地藏堂の傍の蛇籠じゃかごへ腰を掛けてしまいました。そうしてぼん
やりと夜の河原をながめていました。頭はいろいろのことを考
えて、いつぱいになっていました。

「お豊さん」

地蔵堂のうしろから不意に人が出て来たので、我に返ります。

「お豊さん、わしは金蔵じゃ、驚きなさるな」

「まあ、金蔵さん——」

迷うて来た——金蔵は、とうとう幽霊になつて自分に取附いて来た。驚くなと言つてもこれは驚かずにはいられない、お豊は身の毛がよだつて、体がすくんでしまいました。

「お豊さん、驚いちやいけません、金蔵です、金蔵がこうして生き返つて来たのですよ」

藪蔭やぶかげから出て来た金蔵は、糸楯いとだてを背に負つて、小さな箱をすじかに肩へかけて、旅商人たび体ていに作つていました。

「さあ、そんなに驚いちやいけませんというに。お化けばじゃありませんよ、金蔵は生き返つて来たのですよ、お前さんという

ものが思い切れないで、生しよで帰かへつて来たのですよ」

ああ、生き返かへつて来たのに違ちがいない、幽霊しようれいでもお化けおまけでもな
んでもなく、生しよのまままで金蔵きんぞうはここに立たつていゝる。

「金蔵さん、お前は助かりましたか」

お豊おとよは逃にげることもできかないので、やあつとここう言いつてみまます
と、

「ああ、助かりました。あの時、針ヶ別所はりべの山やまの中で、鍛冶倉かじくら
の奴やつにひどい目めに遭あつて、首くびへ細引ほそびきを捲まきつつけられましたがな、
わしはまた、鍛冶倉かじくらを山刀やまばで無暗むやみに突つき立たてて突つき殺ころしましました
よ。わしも一旦い旦たんは縊くり殺ころされたのですがね、しばらくすると息いき
を吹ふき返かへしましたよ。誰たれか知しらん、首くびに捲まきつつけた細引ほそびきをとい
てくれた人ひとがああつたのでね。やれ嬉うれししやと小舎こやへ這はい込こんで見
ると、お豊おとよさん、お前まへの姿すがたは見みえないや……」

金蔵は中腰ちゅううしになつて、お豊の前で、あの時の物語をはじめます。

「見れば鍛冶倉の奴は傍で死んでゐるし、それではお豊さん、お前が逃げる時に、わしの首から細引をといて行つてくれたのかと思つた時は、わしは嬉しかったよ」

「あの、それは……」

「それだけでも、わしはお前さんの親切が嬉しくつて、嬉しくつて。あれからわしは谷を這い廻つてやつと里へ出て、惣太そうたが家へ二日ばかりかくまつてもらつて、それから身体からだもすつかり快くなつたからね、わしはお前、こんなふうかいわいに薬売りの真似をしてね……どこへ行くものか、この界限かいわいを夕方になるとぶらついて、お前の様子を見て廻つていたのだよ、どうか、お前に一目、会いたいと思つてね」

「まあ……」

「お前さんが、旅の人に助けられたことも、薬屋へ送り届けられたことも、薬屋で養生をしてもとの身体になったことも、直ぐわかりましたよ。だからわしはお前さんの家へ忍び込んで、お前さんを奪い出そうとこう思ったがね、荒っぽいことをする前に、一応お前さんに直接じかに会って、わしの心の丈たけをよく聞いてもらつた上のことにしようと、毎日毎日、お前さんをつけねらつていたが、お前さんはまるきり外出をなさらぬ。いよいよ今晚こそと、思い込んだ矢先、お前さんは大急ぎで二階から下りて、植田のお陣屋の方へ行きましたね、占めたとわしはあの時から、お前さんのあとをつき通しで、ここまで来たのですよ」

ああ、どこまで執念しゅうねん深い男おとこであろうとお豊は身慄みおろいを止めることができません。

「金蔵さん、お前のお心は有難いけれども、どうぞ堪忍かんにんして下さい」

「お豊さん、心配しなくてもいいよ。わしはここでは、手荒いことはしませんよ、ただ今晚は、お前さんに、わしの心の丈たけを聞いてもらいたいのだよ」

「金蔵さん、おたがいに、もうそんなことをよしましょう、わたしは帰ります」

「帰しません、一通り、わしのいうことを聞いてくれなければ、ここは動かさせないのですよ、お豊さん……お前さんのために、わしがどれほど苦労したか、お前さんは知るまいねえ」

金蔵はオロオロ声です。金蔵は生はえ抜きはの悪党ではなく、親に甘やかされた放蕩息子ほうとうむすこの上りですから、本気になつて物を言う時には、お坊ちゃんらしいところがないではない。

「わしばかりではなく、わしの親たちまで、お前さんのために飛んだ苦勞をしているのだよ、あの時にお豊さんが、私のところへ来てくれれば、わしも人殺しなんぞをしなくてもよかつたのだよ、ねえ、お豊さん」

「……………」

「いいかえ、わしは、お豊さん、兇状持きようじようもちなのだよ、今にも役人につかまれば首を斬られてしまうのだよ、お前の伯父さんを鉄砲で撃つたのもわしだよ、鍛冶倉を殺したのもわしだよ。そんなに悪いことをするつもりはなかつたけれども、お前さんという者に迷い込んで、そんな悪いことをしてしまつたのだよ、お前さんという人が三輪へ来なければ、わしはこれほどまでに悪い人にはならなかつたのだよ」

「ほんとに済みません、わたしが来なければ、よかつたのでご

「ございます……」

「あ、お豊さん、よく言ってくれた、わしはお前さんに済みませんと言われたのが嬉しい……」

金蔵は、どうしたのか、面を伏せて沈んで涙を拭いているらしいのです。お豊は、どうにもかわいそうになつて、

「金蔵さん、わたしが三輪へ来たのが悪いのですから、堪忍かんにんして下さい、そうしてお前さん、わたしを思い切つて、早く遠い

国へ立退いて下さい、女ひでりの世ではあるまいし、わたしのよくな者をそんなに思つて下さらなくても、世間にはずいぶん立派なお方があるのですから。あなたもお若いに、男の器量ではありませんか、どうか、わたしを思い切つて、お役人に見つからないうちに遠くの方へ逃げて下さい」

「あ……ありがたい……お豊さん……」

金蔵は泣いている。

「お前さんにそういわれると、わしは思い切りたいが……お豊さん、そんなに言われれば言われるほど、思い切れなくなってしまう」

「ああ、どうしましょう」

「お豊さん、お前を思い切るくらいなら、わしは死んでしまつた方がよい」

「そんなことを言うものではありません」

「お前さんが、わたしの言うことを聞いてくれなければ、わしは死にます、自分で死ぬか、役人につかまるか、どのみち、わしは死んでしまうのですよ」

「それですから、早く逃げて下さい、お金が入用いりようなれば、少しぐらい、どうしてもして上げますから」

「お金はあるよ、家を逃げ出す時に持っていたのが、まだこの箱の中にソックリあるから、逃げようと思えば路用ろようには困らないのだよ」

「そんなら、金蔵さん、ずっと遠く江戸の方へでもお逃げなさい、そうしているうちに、縁があれば、またお眼にかかりましたよから——わたしも実は江戸の方へ参ろうかと思つていゝところでございますよ」

「ナニ、お豊さん、お前が江戸へ行く？ それはほんとかい、ほんとならば一緒に行こう、ぜひ一緒に逃げましょう」

金蔵は涙の面かおをやつと擡もたげる。お豊は言い過ぎたのを気がついて、

「けれども、わたしのは、いつのことだか知れませんが、お前さんの急場きゅうばですから」

「そんなことを言つても駄目、わしに一人で江戸へ行けなんと言つてもそれは駄目だよ」

「そんなことを言わずに、お逃げなさい、あの景けいのよい東海道を下つて、公方くほうさま様のお膝下ひざもとの賑かさをごらんなされば、わたしのことなどは思い出す暇はありやしませんよ」

「駄目だ駄目だ、公方様のお膝下がいくら賑かでも、お豊さんという人は二人といやしないからねえ」

「どうも困りました」

お豊は、もうなんといい賺すかすこともできなくなつてしまったものです。

「お豊さん、わしはこう思つているのだよ、まあ聞いて下さい。わたしのためにわたしの親たちまでが、この土地にいられなくなつて立退いたことは、お前さんも知つていてでしょう」

「はい……」

「その、わしの親たちはね、母親の里なのですよ、紀州の山奥りゆうじんに竜神という温泉場があるのですよ、そこでね、いま温泉宿をやっているのですよ」

「はい……」

「こちらの身上しんしょうを、すっかり片づけて、紀州へ隠れて、かなりの温泉宿をやっているのですよ。どうです、お豊さん、そこへわたしと一緒に行きませんか」

「紀州へ？」

「エエ、わたしもね、お前さんの伯父さんを鉄砲で撃ったけれども、それはちつとも悪気わるぎがあつてやったわけではなし、お前さんを欲しいばかりでしたことなのだよ。仕合せに傷も今ではすっかり直ったそうだし、鍛冶倉の野郎は殺した方が人助けな

んですからね、国越しをしてしまえば、もうそんなに役人に睨にらまれることはないのですよ。紀州の竜神へ行つて温泉宿をやり、わしが亭主になつて、お前がお内儀かみさんになつて、所帯しよたいを持つてうではないか、ね、そうして下さい、お豊さん」

金蔵は、ねんごろに、首こゝべをさげ手をつか**ん**ばかりにしてお豊の前に願うている。

「けれどもねえ、金蔵さん、お前のお心はほんとうに有難いと思うけれども……」

「ウム、やつぱりいけないのかいお豊さん、どうしても、お前はわしの言うことを汲くみわけてくれないのかい」

「お前さんの心は、よくわかつているけれども……」

「心だけでは駄目だよ、お豊さんが、わしの言う通りになつてくれなければ、わしはどのみち無い命だからね……」

「金蔵さん、どうか短気なことをしないで辛抱しんぼうして下さいよ、そのうちにはねえ……」

「そのうちにはと行って、お前、そのうちにわしが役人につかまったらどうします。どうか、お前さん、わしと一緒に逃げて下さいよう」

「そんなことをおっしゃっては困ります」

「そんなら、お豊さん、どのみち捨てる命だから、わしは死ぬ、死ぬけれども、一人では死なないよ、ああ、一人では死ねないのだよ、お豊さん」

「どうも困りました」

「困ることはありやしない、お前さんが、わしの心を汲みわけてさえくれたなら、わしの命も助かる——お豊さん、わしは、お前のからだに指一本だつて指しやしないよ、ねえ、お豊さん、

いいかえ」

「金蔵さん、そんなことはできません」

「できない？」

「エエ、少し都合があつて、お前さんと一緒に逃げることはできません」

「ほんとにできない？ できない？ そんなら」

ここに至つて金蔵は懐中から短刀を一本取り出します。

「お豊さん、では、お前を殺して死ぬよ、無理心中だよ」

金蔵は悪党に返つた。

「金蔵さん、殺して下さい」

意外にもお豊は驚かなかつた。

「ここでお前に殺されたとして、誰もわたしが、金蔵さんと心中したと思うものはありますまい、どうせ、わたしも罪の尽きな

い身体からだですから、お前さんに殺されて上げましょう、さあ殺して下さい」

「ナニ、殺せ？ よし殺すとも」

金蔵は短刀の鞘さやを払って、お豊の胸元を左の手で掴む、お豊は争わず。こうなつてみると、無茶な金蔵にも刃やいばが下せない。

「お豊さん、殺される命なら、ナゼ生きた身体をわしに出来ないのだい……同じことじゃないか、生きていた方が割がいいじゃないか」

「金蔵さん、もうそんなことを言わないで、早く殺して下さい」
「殺す、殺すには殺すが……お豊さん、もう一ぺん考えてみておくれ」

「わたしは死んだほうがようござんす」

「死んだ方がいい？ ああ、なぜお前はそんなにわからねえの

だ。よし殺す……そうしてお豊さん、わしは、ここでお前を殺しておいてね、薬屋の家へ火をつけるよ、それから、陣屋の植田へも火をつけるよ、その上に三輪の神杉へも鉄砲の煙硝えんしやうを振りまいて火をつけるよ、そうして薬屋の者も丹後守の奴めも、殺せるだけ殺して、わしはその火の中で焼け死ぬのだ、いいかい——」

「まあ、金蔵さん——待つて下さい、待つて下さい、金蔵さん」
お豊は今となつては、金蔵の手を抑おさえて、

「金蔵さん、お前は、わたしの命を取つただけでは堪忍かんにんができないかい、そんな大それたことをホントになさる気かい」

「するとも——あの薬屋の源太郎めは、わしの親から、お前さんを貰もらいたいと頼んだのに、てんから謝絶ことわつてしまいやがった。あの丹後守は、お前を隠して、わしに会わせなかつた。この二

人は深い怨み^{うら}だから、わしは、ここでお前を殺しておいて、その怨みを晴らすのだ、刷毛^{はけ}ついでにあの三輪の杉へ火をかけて、丸焼きにしてくれる」

「ああ、どうしましょう、金蔵さん、それだけはよして下さい、わたしをここで存分に斬るとも突くともして、それでほかの怨みは帳消しにして下さい」

「そうはいきませんよ、わしの親たちが、先祖からのこの三輪の土地にいられなくなつたのは誰のおかげだい——わしはもう、あの三輪というところを焼き亡ぼしてしまつて、そうしてその火の中で焼け死ぬのだよ」

「金蔵さん、なぜ、お前はそんな怖ろしいことをします」

「そんな怖ろしい心にしたのは、誰だい、お豊さん」

「金蔵さん、そんな無理なことを言わないで……」

「何が無理だい、お前が人のおかみさんならば、わしの言うことが無理かも知れないが、お前は定まる夫のない身ではないか、それにわしが思いつめたのが無理かい」

「ああ、わたしは、どうしてよいかわからない——」

「わからないことはないのだよ、わたしと一緒に、お前が逃げてくださいえすれば、わしは全く心を入れかえて、お前が商売をしろと言えば商売もする、江戸へ行きたいといえれば江戸へ行く、どうしてお前のからだに、こんな怖ろしい刃物なんぞを当ててよいものか……お前を大切だいじの大切のものにして可愛がるのだよ、薬屋やお陣屋へ火をつけるなんぞ、そんな大それたことを、誰が好きこのんでやるものかな……お豊さん、もう一ぺん考え直して下さい、わしは、お前が思い切れない——」

金蔵はお豊の胸倉むなぐらをはなして、その手で滝のように落ちる自

分の涙を拭きました。無体むたいの恋慕れんぼながら真剣である、怖ろしき
の極みであるけれども、その心根こころねを察してやれば不憫ふびんでもある。
「金蔵さん、わたしには、わからない、どうしてよいのかわか
りません」

「お豊さん、そこで静かに考えて下さい、わしも考えるから」

お豊の見た眼に誤りはなく、机竜之助はかの伊賀の上野から、
松本奎堂けいどうらの浪士と一緒にたまたまた大和の国へ逆戻りをして
来たものです。

薬屋の二階からその姿を認めて、お豊がここまで足を引かさ
れたことも、まるきり夢ではありませんでした。

しからば、竜之助は今どこにいるか——なんでもないこと、
川を隔てた直ぐ向うの桜井の町へ、一行の浪士と共に宿をとつ

ているのでした。

これら浪士の一行が、この後、中山忠光ただみつを奉じて旗上げをした。「天誅組」の卵であることは申すまでもありません。
てんちゆうぐみ

「天誅組」は天忠組である、天朝てんちようへ忠義を尽す義士たちの寄合いである。そうして机竜之助は、かの新徴組から新撰組にまで、腕を貸した男である。新徴組や新撰組は幕府の味方である、天忠の志士とは根本から目的が違うのであります。

では、机竜之助こそ、松本奎堂あたりに説かれて、改めて天朝へ忠義の心を起したか、徳川へ尽す志を変じたか。

そんなはずはない、竜之助が新徴組に腕を貸したのとても、なにも徳川に恩顧があるわけでもなければ、幕府を倒してはならないという義憤があるわけではないので、ただ行きがかり上そうなったまでであります。

されば、「天誅組」の仲間になつたとしても、事改めてギリギリ齒を嚙かんで尊皇攘夷そのんのうじょういを絶叫するなんといい勢いになれるはずがないのです。ただ、あの喧嘩の一幕を納めた松本奎堂の意気が面白い。

「どうじゃ、吉野の方へ遊びに行かんか」

「行つてもよい」

これで相談が纏まとまつて、彼は一行の中に加わつて、またも大和の国へ逆戻りをして来たものです。

けれども、竜之助の大和の国へ逆戻りをして来た縁故がただこれだけであると思ふのもあまりに淡泊たんぱくであります。

宿に着いて、風呂を上り夕飯も済んで例の浪士どもは、慷慨悲憤こうがいひぶんの口調で、国事の日かに非なるを論じ合っていたが、竜之助はそれに拘からず外へ出ました。

彼は深い編笠の紐を結びながら、桜井の宿を出て初瀬河原の方へ行く。天はうすら曇つて月は朧おぼろのようだ——かの仮橋を渡つて微行しのびゆく机竜之助はどこへ行くつもりであるか。

竜之助は三輪へ行くつもりで初瀬川の橋を渡つて、ちようどかの地蔵堂の竹藪たけやぶのところまで来かかりました。天にはやはり月がある、地には露がある、螢は露をたずねて飛ぶ、人は情に引かれて忍ぶ。

竜之助は、今、河原の地蔵堂のところまで来た。そうして、月影のさすところの行手に二つの人影を認めた。

男と女、どちらも若い。

そして、どちらも泣いているようだ。日の光のさすところで会えない連中が、月影に忍んで泣き明かすのである、無下むげに

驚かすにも当るまい。さりとして、そこを通らず露の竹藪を横切るのは考えものだ。

「金蔵さん……」

泣き伏していたような女が面を上げる。ああ、その声は……
竜之助は、立ってしまった。幸い、そこに地藏堂の蔭がある。

「お豊さん」

若い男の声、これも聞いたことのあるような声。

「金蔵さん……わたしは覚悟をしました」

女は覚悟をしましたと言う。覚悟とは何をいう。

竜之助は、この女あるが故に、大和に舞い戻ったのではないか。

若い男は、

「お豊さん、覚悟とは何だい」

「金蔵さん、わたしは、もう諦めてしまいました、わたしの身は、お前さんに任せてしまいます」

「ナニ、わしに任せる……それは真実か、お前は、わしと一緒に逃げてくれるか……」

「よろこ 歡ばしきに若い男の萎れた五体は跳ね起きて、女の肩へ手をかけて、

「よく言ってくれた、それは嘘ではあるまいな」

「からだ とても、こうした身体でございませう、その代り金蔵さん、決してほかの人を怨んで下さるな……」

「かな そうきまれば……お前さんさえその気なら、なんで人を怨もう。ああ嬉しい、わしの願いが叶った……こんな嬉しいことはない。お豊さん、これから直ぐに紀州へ逃げましょう、あのさつき話した通り、紀州の竜神というところへ逃げましょう、そこ

にはわしの親たちが温泉宿をやっている……ああ嬉しい」

竜之助のここへ来かかることは遅かった。

さいぜんからの始末をようやく聞いていたならば、お豊の覚悟をしたというわけも、金蔵の嬉しがるわけも、すっかりわかるのであるが、これだけ聞いたのでは聞かない方がよかった。

何だ！ 軽薄な女。

もう自分のことは、すっかり忘れてしまつて、ここでは別の若い男と出會つて、身を任せる——ごんく言句は絶え果てた……男一匹がこの女のためにさんざんにほんろう翻弄されていたのだ、人を斬ることの平気な竜之助は順序として、ここで、この二人を並べて置いて斬るであろう——けれども竜之助は、刀へは手もかけないしは齒齧みがをしている様子もない。

昔は、この女がまた別の男と心中の相談をして遺言かきおきを書いて

いるところを、よく知り抜いていながら助けようとしなかつた。今は同じ女が仇あだし男おとしに身を任せると誓いを立てたのを聞いて、やはりそのまま置く竜之助の気が知れない。

「お豊さん、お前はいつたん死んだ体、わしもいつたん地獄を見て来た体、生うまれ更かわり同士がこうして一緒になるのも三輪の神様のお引合せだね」

金蔵はお豊の手をとった。お豊は金蔵のする通りにさせて、争わない。

竜之助は、地蔵堂の蔭に立ったなりに、何と手出しもしませんでした。

大菩薩峠 三輪の神杉の巻

底本：「大菩薩峠 1」ちくま文庫、筑摩書房
1994（平成 6）年 12 月 4 日第 1 刷発行
1996（平成 8）年 3 月 10 日第 5 刷

底本の親本：「大菩薩峠」筑摩書房
1976（昭和 51）年 6 月初版発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号 5-86）を、大振りにつくっています。

入力：(株) モモ

校正：原田頌子

2001 年 5 月 11 日公開

2004 年 3 月 6 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。